

その前提 見直してみませんか？

～物好きな家庭教師による教育事始

b y 広島の家家庭教師藤田

はじめに

私はフリーで家庭教師をしています。

私には一つの能力があります。それは、他の塾や家庭教師、あるいは通信教育などで上手く行かなかった子供達、あるいは依頼をたらい回しにされ、どの教育機関に通っても、一向に学力をはじめ状況が改善されない子供を引き当てる、と言う能力です。

ですから、そのような子供を中心に指導する私を、周囲は「物好きだ」と言います。

参考までに、これまでに持った子供たちの大まかな特徴は以下の通りです。

●発達障害の範囲が疑われる場合

- ・知的障害（中度の障害）
- ・広汎性発達障害
- ・多動（ADHD）
- ・学習障害（読み書き、言語、算数）

●発達障害ではないが、人間関係や周囲の環境に特筆すべきものがある場合

- ・不登校である
- ・友達と呼べる人が少ない（あるいはいない）
- ・「勉強は」上手くいっているが、心理的に浮き沈みが激しい
- ・家族に特筆すべき事項がある（離別、死別など）
- ・育った環境が違う（帰国子女、親御さんが外国籍）

私の中では、「普通」ですが、指導した子供のラインに、多くの方が驚かれると思います。また私はこれらの子供達のサポートを一人でやっているという「物好き」具合です。

その理由は、一人のほうが、小回りが利きますし、自分の判断で、迅速に行動できるという点が大きいように思います。多くを持たず「細く長く」が私の仕事のモットーです。

私が担当する子供達は、基本的に皆、小中学生の段階で、人生を諦めかかっています。なぜなら、学習面においても人間関係においても「上手く行かない」為です。

また、子供達を理解すべき親御さんをはじめ周囲からは「バカだ・デキが悪い・理解度が低い・自己中心的・反抗的」と言う評価をもらっている事も多いです。

けれども、その一面が子供達にあるのは確かなのですが、それが問題の根本原因であるということは稀です。つまり、原因が他にある事が多いです。

今回は、特に発達障害が疑われるラインと、その周辺のお子さんについて、考えてみたいと思います。ちなみに、私自身もこの分野を独学で勉強しています。

皆さんが考えている「発達障害」とは、おそらくイメージが違うはずです。けれども、私が実際に指導したお子さんについて考えた事ですので、その意味で「真実」です。

また、私が指導する生徒さんは全て通常学級に在籍しています。よって、皆さんの子供の隣に座っている方の事を理解するきっかけになるかもしれません。

この本を読むことで、子供達の現状や、困り具合を具体的に理解して頂ければ、子供達のサポートもより進んでいくと、少なからず、期待しています。

はじめに

目次

## 伸び悩む子供達の現実を把握する

### 第一章 子供の「ワカラナイ」を解く

#### ●日常生活について

##### ① 分かるようで分からない言葉

「えっ？」の連続 高い確率の間違い 小学校以降に多い左右の間違い  
小学校までに取り組むほうが良い 利き手の修正は厳禁

##### ② 驚愕！ 子供達の社会ルール

挨拶は無視して平気？ 知っている人だけ？ ありがとうは「物」だけ？？  
助けてもらう為に 「悪い」の意味 ごめんなさいの別用途？  
言葉のキャッチボール 「分からない」の使い方 家族内で注意する事

##### ③ 手や足の静止方法（動かし方）を教える

ハンターがいる？ 例えるなら〇〇 不器用を越えた不器用さ

#### ●学習について

##### ① 「読む」事の奥深さを知る

本読みではなく「字」読み？ とびとび読み どこを読んでいますか？

##### ② 「書く」事の奥深さを知る

何種類もある表記法 難しいのは似た文字 どちらでも〇？ 克服の仕方  
難しい助詞、促音、長音 書き順には目をつむる

##### ③ 数の概念・単位・グラフ・計算の奥深さを知る

数は難しい 単位はもっと難しい グラフってそう読むの？  
足し算・引き算のコツ 文章題はお手上げ？

### 第二章 今あるサポートの問題点を解く

#### ●子供達が受けているサポート

##### ① 通常学級のサポートでは何が問題なのか？

邪魔な存在？ 本当に気がつかないのか？ 概念の間違い  
問題点を共有する 最低限のルール 両者に配慮を！

##### ② 支援学級でのサポートは何が問題なのか？

ガイジって何？ 誰の為の学校か？ 名前の問題

##### ③ 他の専門機関でのサポートは何が問題なのか？

プラチナチケット 大学発 料金はバカ高 場所の問題

##### ④ 専門機関以外でのサポートは何が問題なのか？

役割は果たしている？ 家庭教師の対応 協力体制 一番下

#### ●親御さんが受けているサポート

##### ① 学校との連携では何が問題なのか？

最も信頼できない？ 責任回避の姿勢 学校での情報 不審に思ったら  
分かっている！は本当か？

② 家族間の連携では何が問題なのか？

男親の弱さ 女親の弱さ 他の家族は何をしているか 兄弟で同じ場合  
兄弟で違う場合

③ 地域社会での連携では何が問題なのか？

隠す姿勢 お友達がいない？ 不安の原点 発達障害は不幸か？  
憐れみを捨てて

**これからすぐできる教育改革**

第三章 これからの教育の将来を解く

● 学校に望む事

① 学校の先生の質の向上

質が悪いというよりも… 研修制度の充実  
どのラインの子供に授業の質を合わせるか？ 引退した先生  
授業前・授業後クラス 一緒に学ぶ場 就学前勉強会 高い教材

② 教育のシステムの変革

大きな問題 一ヶ月・夏休み前・一年 病気だったら 学校医

③ 「超独断」進学校の利用

お医者さんばかり？ お医者さんの専門性 ボランティア  
ボランティアの意義

● 家庭に望む事

① 親御さんの認識を上げる

本は指針 実際にわが子を検証する 親に受け入れられる事  
手を出しやすい教材を！

② 「必ず」診断を受ける

診断拒否の理由 親の義務 発達支援センターの存在

③ 希望を持てるサポートシステム

お先真っ暗にしない サポート体制の現実 見えるサポート 支援が先？

● 社会に望む事

① 発達障害の存在を知る

「分からない」存在？ 親でさえ分かっていない？ 知る努力  
人の成長と言う事

② 孤立を防ぐ

難しい思春期 私が守らなければ… 孤立とは… 支える難しさ  
長い面談？

③ 社会的企業

心配の先 社会的企業 私の大きな夢

最後に

あとがき

## 伸び悩む子供達の頭の中身を把握する

この本では、以下の「前提」と向き合っていきたいと思います。

- ☐ 子供は、母語が理解できており、使えているという前提
  - ☐ 学童期の子供は、左右上下を理解できているという前提
  - ☐ 生まれ持った「障害」は改善せず、治らないという前提
  - ☐ 周囲の人に「障害はバレていない」という前提
  - ☐ 挨拶はできているという前提
  - ☐ お礼は言えているという前提
  - ☐ 「何が悪いかわかるうえで」謝る事ができるという前提
  - ☐ 物事を記憶する事ができるという前提
  - ☐ コミュニケーションのルールが分かっているという前提
  - ☐ 子供が「分からない」と言う事を周囲が把握しているという前提
  - ☐ 子供が静止できない事は仕方がないという前提
  - ☐ 不器用さは改善されないという前提
- 
- ☐ 文章を読むことができるという前提
  - ☐ 視力が悪くないので、目は見えているという前提
  - ☐ 「そのとき間違っただけ」という前提
  - ☐ 学童期の子供が、ひらがな・カタカナを習得しているという前提
  - ☐ 言葉の表記方法が分かっているという前提
  - ☐ 脳が「文字」として言葉を捉えているという前提
  - ☐ 数の大小が理解できているという前提
  - ☐ 単位とは物の量や大きさを表す事が分かっているという前提
  - ☐ グラフは読めるという前提
  - ☐ 足し算・引き算はできるという前提
- 
- ☐ 学校は機能しているという前提
  - ☐ 家族は機能しているという前提
  - ☐ 専門機関は機能しているという前提
  - ☐ 専門機関以外は機能しているという前提
  - ☐ 発達支援のシステムは機能しているという前提

## 第一章 子供の「ワカラナイ」を解く

### ● 日常生活について

#### ①分かるようで分からない言葉

##### 「えっ？」の連続

通常学級に通っている子供達を持つ親御さんで、自分の子供達が様々な「簡単な」言葉を理解していないと知ったら非常に驚かれると思います。

以前、私の友達はこのように言っていました。

「この子は、色が分からない。」

その当時二歳のお子さんは、色の概念があやふやだったようで、はじめての子育てを頑張る私の友達は、その事に驚き心配したようですが、これから学んでいく幼児期の課程では、当然、起こりうることだと思います。

つまり、通常は、多少の間違いがありながらも、小学校に上がる頃までには、基本的な言葉を獲得し、上手に使いこなせるのが通例だと思います。

けれども、私が持つ子供達はこの点が大きく異なります。そして、これは珍しい事ではありません。

例えば、「行く」と「来る」の使い方がおかしかったり（例えば、自分がお友達の家に行くときに、「今からくるね！」と伝えたりする）「急」と「ゆるやか」の意味が逆に思っていたり、また「実がなる」と言う表現から「花がなる」と使ってみたり。

その際、こちらで気がつけば訂正するのですが、一度「頭の中にインプットされた」言葉は、なかなか修正される事がなく、そのまま使ってしまった様子もよく見られます。

けれども不思議なのは、その事柄について、親御さんが把握していないケースがあるということです。

「まさか我が子が、こんな言葉を理解していないとは…」

と愕然とされるかもしれませんが、人間関係がスムーズにいかない、指示されたことをきちんとできない場合は、一つ一つの言葉自体を、確認する事をお勧めいたします。

特に意味が広い言葉や、使い分けがある言葉などは注意が必要です。また、対義語や似た表現があるものは、間違いやすいという印象があります。

##### 高い確率の間違い

その中で、もっとも高い確率で間違えるもの…

それは、「左右」の間違いです。

皆さんは、幼稚園や保育園のときに「アブラハムには七人の子♪」という歌い出しで始まる曲を習いましたか？

私はそれを習った当時、ある疑問がありました。

「みんな、なぜスグに右手と左手が分かるのだろう？」

と言うものです。

幼稚園当時の私は、手にはどうやら「右手と左手がある」と言うことは分かっていたのですが、それが「瞬時に」どちらかを言えるほど、左右の概念がありませんでした。

いつも考える経路は同じです。

お箸を持つ手→手で物を食べる様子を思い浮かべる→右手が分かる→だから反対が左

よって、音楽に合わせて左右の手や足を出すのは至難の業でした。

考えてみますと、小学校前の子供達では、靴の左右を逆に履いても違和感がない言う具合に、左右があやふやなお子さんも多いと思います。その状況が、終わりを迎え、左右の間違いを指摘されて、「間違った」と思えるのであれば、それは通常の発達の過程です。

#### 小学校以降に多い左右の間違い

通常学級に所属し、小学校に上がっているどのお子さんも（これは中度以降の知的障害があるお子さんを除いてですが）どちらの手が右なのかを聞くと、きちんと答えられます。

けれども、例えば、鏡文字（左右が逆の文字）を書いたり「へんとつくり」を逆にしたり、重要なところを線で引かせると、右に引くべきところを、左に線を引いたりします。

そして、これが大きな特徴なのですが、「何かおかしくない？」と尋ねても「おかしくない！」と元気に答えるのが普通です。

百歩譲って、うっかり左右を間違って書いてしまっても、後から見たときに、おそらくその左右を逆にしている「おかしさ」に気がつくことが通常だと思います。

けれども、私が指導する子供達は、かなり高い確率で、この左右の区別がつかない、あるいはつきにくいと言うのが特徴です。

加えて、より程度が厳しい場合には、上下の間違いをする子供さんも見られます。

#### 小学校までに取り組むほうがよい

自分の子供が、いつまでも左右を認識しないと、不安を覚える方も多いでしょう。

そのように、上下左右の区別がつきにくいお子さんのために考え出されたプログラムは存在します。

「感覚統合療法」というものです。

これには、診断書があれば、受けられる施設がありますが、なくても大丈夫な施設があります。ちなみに、保健が適用されるのは小学校一年生までです。

遊びながら、身体感覚を養うと言うものなので、早めに発達支援センターなどに、ご相談されることをお勧めいたします。なぜなら、文字を覚える時や、指示される事を理解するのに左右の認識は不可欠である為です。そうすれば、

「右に、筆箱を置いてくださいね。そして左には、教科書を置いてください」

と言う学校の先生の指示に、戸惑う事無くやっていけると思います。

## 利き手の修正は厳禁

また、案外知られていないことですが、利き手を修正することによって、左右が分かりにくくなる事が、体験者によって指摘されています。

よって、「全ての作業を」もともとの利き手で行う事が重要だと私は考えています。

よくあるのが、元々左利きのお子さんを、「えんぴつだけ」右に持たせると言う事です。

前に書いた事柄のように、子供達は「利き手を中心にして」左右を認識する事が多いと思います。よって、「利き手ではない手」を利用するように言われると、左右が混乱する事は、当たり前なはずです。

また、右利きの子供を、わざわざ左に持ち替えさせるのでしょうか？答えは「いいえ」だと思います。同じように左利きの子供も、その特性をきちんと分かった上で、「全ての作業を」生まれ持った利き手でやらせてあげてください。

ちなみに、これらの不必要な利き手の修正をやった場合に、起こりえると考えられている一つの現象が学習障害です。対照は外国の子供でしたが、見過ごせない確率で、これらの利き手を修正した子供に、学習障害の子供が含まれるようです。

私自身、学習障害の全てのお子さんではありませんが、利き手を修正したケースで、左右が分からず、文字を覚えにくく、記憶が難しいお子さんを、実際に何度かみました。

確かに、利き手を修正しても、問題が無い場合もあるようです。

けれども、その修正にはかなりのリスクが伴う事を、きちんと周知する必要があると思います。

また、全ての事柄を左利きで行っているお子さんに、左右の混同や、文字の認識、記憶の問題はありませんでした。

ちなみに、この左右の認識について、発達支援センターに連絡をしたところ、「あなたのほうが詳しい」と言う事で、まともに回答してもらえませんでした。また、「学習障害は分かりません」と言うのが発達支援センターの方の答えでした。(ちなみに相談内容に項目に「学習障害」と明記してありました)

私は、子供を持つ予定の友達には、必ずこう伝えています。

「子供の利き手は、修正してはいけない。なぜなら左右が分からなくなるリスクがある」

親御さん自身が、特に修正しようと思っていなくても、祖父母に修正されるケースもよく耳にする事です。「孫のために左利きはよくない」この考え方そのものが、おかしいと言う事を理解してもらう必要があります。

生来のものを「修正する」という危険性をきちんと話した上で、子供達の左右の能力及び学習の能力を守ってあげてください。



## ② 驚愕！ 子供達の社会ルール

### 挨拶は無視して平気？

皆さんのご家庭では、子供達が朝起きたときに、「おはよう」と声をかけますか？

加えて、その親御さんの「おはよう」にきちんと返事が返ってきますか？

この単純で、しかも誰でも出来そうな事柄ですが、私が指導する子供達は、出来ないことが多いです。

「ウチの子は、シャイなのです」

とおっしゃる方もいるかもしれません。

けれども、「挨拶を自分からする」事は難しくても、「挨拶をされたら、きちんとそれに答える」と言うことは出来ると思います。

「挨拶なんて、別にしなくてもいいのでは？」

と考える方も多いでしょう。

けれども、挨拶をすると言うことは、相手を「人間として認めている」と言うことになると思います。なぜなら、挨拶をされないと「無視された」と相手は感じる為です。

おそらく、「挨拶をしない」という自分がとっている行動が「相手を不愉快にさせる」と言うことを教えてもらっていないのだと思いますし、それが、分からないようです。

通常は、相手が怪訝な顔をするので気がつくと思いますが、基本的にそれらの周囲の状況に鈍い子供達が多いので、そのまま何もせずに通り過ぎることも多いようです。

### 知っている人だけ？

私は犬を飼っている為、朝散歩に行くのが普通ですが、その中で面白い事柄があります。

私と挨拶をする人は、基本的に年配の方が多いのです。

幼稚園や保育園に子供を送る若い親御さんにも会う機会が多いのですが、こちらが、頭を下げて、目礼もしないのが普通です。

けれども逆に、送迎をする方がお年寄りの場合、お孫さんも含めて、きちんと挨拶をしてくれます。「見せる」と言う事は、非常に重要である事が実感としてあります。また、子供達の理解として「親の前では」挨拶をすると思っている場合もあるので注意が必要です。

そして、挨拶をする事でとても重要なのは、その方と「顔見知り」になることです。

私は挨拶をする方の、名前も住所も知りませんが、普通に立ち話もしますし、また声もよくかけて頂きます。

今の世の中では、子供達だけで登下校するのが、非常に物騒になっています。加えて、送り迎えができる親御さんはよいですが、共働きであるお宅も多いでしょう。

近所の方に見守って頂き、声をかけてもらうことこそが、私は子供達の安全に重要なことであると思います。また、私が指導する子供達は、「自分で考えて」その場にあった行動をする事が難しい事を考えると、顔を覚えてもらうことは非常に重要な意味を持ちます。

「自分はここにいるよ」

と近所の人にお披露目する絶好の機会が、挨拶であると教えるのは無駄でないと思います。

### 「ありがとうは「物」だけ??」

そんな子供達が言わない言葉の一つが「ありがとう」です。

けれども、面白い事に、確実にいう箇所があります。それは、「物をもらったとき」です。

私が指導する子供達は、一つを教えてもらったら、似たような場面や事柄について、自分で判断して応用していくと言うことが難しいことが多いです。

おそらく親御さんから、

「物をもらったら、お礼を言うように」

と言うことは指導されているのだと思います。

けれども、「何かしてもらったり、助けてもらったり、声をかけてもらったら」お礼を言うという事まで教えなければ、「ありがとう」を言えないと考えて間違いないと思います。

「有難うと言われないと、あなたも嫌でしょ？」

このような「相手の立場に立つ」という視点は、通常であれば、成り立つと思います。

けれども、「有難う」の使う場面が分からないお子さんであれば、理解は難しいと思います。

よって、「有難う」をいう場面を一つ一つ教えていくと言う作業が必要です。

### 「助けてもらう為に」

また、基本的に、私が持つ子供達は、動作や判断が遅いことが多く、何かの課題を仕上げるのに、「異常に」時間がかかったり、もたついたりするのが普通です。

よって、お友達から、

「大丈夫？手伝おうか？」

と言われて、皆さんの子供達は何というのでしょうか？

おそらく、「何も」言いません。私の前では無反応…もよくあります。

そのような子供達をフォローする為に書いておきますが、

「何かしてもらったわけではないし、ましてや何かをもらったわけではない」

という思考回路から、子供達は、お礼を言う必要はないと思っている可能性があります。

よく親御さんが、「ウチの子を、周囲の人は、誰も助けてくれない」と言うことを口にすることがあります。

けれども、このやりとりが、実際にあったとして、お友達は次も声をかけてくれるでしょうか？おそらくそれは難しいと思います。

なぜなら、お友達は、「声をかけないほうが良かったのかな？」と思っているためです。それがつまり、「手伝わない方がいいかもしれない」という結論に達しても、何も責められることはないでしょう。

気にかけてくれている周囲の人の気持ちを、親御さんが代弁し、その都度、対応方法を理解させる必要性を感じます。

なぜなら、私が、その場面の状況を説明したときに、「目をまん丸にして」驚くお子さんは結構いる為です。彼らの世界に「お礼を言う」という文化を吹き込んであげてください。

勿論、ご家庭においても「言葉をかけあう」という工夫が、いくらでも、出来ると思います。ちなみに、私は、子供達の前で「おおげさに」お礼を言う事もやります。

## 「悪い」の意味

「ごめんなさい」

この一言で、割と様々な事が丸く収まるのが、日本の社会だと思います。

確かに謝りすぎるのもよくありませんが、「全く我関せず」の態度を我が子に取られて、激昂する親御さんも多いようです。

子供達が謝らない理由…。それは、以下のものかもしれません。

「分からない宿題や課題は、やらなくても仕方がない」

私が目にする親子喧嘩の多くが、この「指示された事をやったか否か」と言う点です。

そして、子供達を取る行動は、「全否定」つまり「指示された覚え自体がない」と言う論点です。この一見すると投げやりに見える、あるいは反抗的な態度にウンザリする方も多いはずです。

このようなトラブルは、記憶の問題も関連するので重要なのですが、これをしょっちゅう繰り返すお子さんは、短期記憶に問題がある可能性があります。

全く悪びれていない場合や、子供さんが本気で「聞いていない」と激昂するような事があれば、指示された事柄などを理解し、その後、記憶した事をやっておく、と言うことが難しい可能性があります。

また、「自分の都合がよい」方向に、記憶がすりかわる、と言う事もしょっちゅう起こります。これは、意識してやる場合もあるかもしれませんが、無意識の事も多いようです。

これは、話を詰めていくと、子供達が「事実」を思い出すので、無意識の場合は、決して責めてはいけないと思います。そして、「自分の記憶」に絶対的な自信を持つ場合もあります。しかもそのタイプのお子さんほど、記憶が危うい事が多いです。

そして、このような子供達とのすれ違いや認識の違いを埋める対応は、比較的簡単です。

つまり、紙などに、指示内容や、やる事を大きく書いておけばよいだけです。

特に、指示の内容が、複数の項目ある場合には、指示が、何個か抜け落ちることが多いです。よって、双方の幸せのために、きちんとメモを取ることをお勧め致します。

勿論、子供達がメモを取ってもよいのですが、メモ自体の取り方自体が分からないことも多いので、必ずそばについてあげて、メモを見てあげてください。親御さんだけがメモを書いた場合「自分の知らないところで勝手に書いた」と思うケースもあるので、子供達が自分で書くことが望ましいです。

またそのメモは「長い」文はダメです。二つ以上の要素がある場合は、分けて書いてください。つまり、「短く」「簡潔に」箇条書きにまとめたものを見せてあげてください。

×

帰ったら、脱いだ服を洗濯機に入れて、カバンを自分の部屋に置いてから、カギをかけて遊びに行く。

○

- ①脱いだ服を洗濯機に入れる
- ②カバンは自分の部屋に置く
- ③家のカギをかける

### 「ごめんなさい」の別用途？

そして、子供達が「悪い」事をして、「ごめんなさい」と言っても、親御さんをはじめ、周囲の人々が、より逆上することがあります。

それは、「ごめんなさい」と言いさえすれば、何をしても良い、と考えている様子が伺える場合です。そのような時には、「子供達の顔が」全く無表情である場合が多いです。

そのような子供達は、「とりあえず」謝りますが、怒られる理由が分からないので、悪いとは思っていないです。改善する気がなく「何度も何度も」同じ失敗を繰り返します。

その時は、指示の仕方や、指示の内容を変えたほうが賢明かもしれません。

例えば、「書く」という課題が嫌な子供には、「読む」事や「なぞる」事を指示すると、こちらが、拍子抜けするほど、すんなり自分で頑張ったりします。

ここで、その頑張りをけなしてはいけません。

とりあえず、「出来ることから」「少しずつ」と言うのが、伸び悩むお子さんを指導する鉄則なのですから。

### 言葉のキャッチボール

前の文章のように「ごめんなさい」の使い方がおかしい、話しかけても反応しないなど、私が担当する子供達は、言葉のキャッチボールが成り立たない事が多いです。

また、挨拶でさえ成り立たないのですから、他の会話が成り立つ可能性は、同年代の子供達と話をしても、かなり低いと思われます。

つまり一方的に話したり、あるいは黙り込んだり、突然話し始めたりと言う具合です。

逆に言えば、子供達が学校で上手くいっているかどうかを簡単に見分ける事もできます。それは、「先生はどうだった？」「先生はどう思う？」と言う具合に、相手に興味を持って、話を相手に振る事ができるかどうかです。

友達が多いタイプのお子さんは、年齢に関係なく、まず間違いなくこれができます。

けれども、人間関係に苦労している、あるいは友達と呼べる人がとても少ない場合には、この法則は成り立ちません。

「常に」一方的な感じです。そして、子供の話す内容がよく分からない事が多いです。なぜなら、「相手が自分の体験を知っている」と言う事が前提で話すためです。また、主語や述語、目的語などの並びがおかしい事もあり、余計に判断が難しくなります。

そのような場合には、「分からない！」と言うのではなく（これを言うと、子供達は傷ついてあまり自分から話をしなくなる事もあるようです）疑問点を少しずつ尋ねると、断片が浮かび上がり、徐々に理解できると思います。

ちなみに、私はそのような「類推」が職業柄得意です。自分の中では「なぞなぞ」と同じ感覚です。そのように、話を聞く側が、楽しんでみる事も、時には必要かもしれません。

### 「分からない」の使い方

考えてみますと、自分が話したいことについて、友達に伝える事は悪いことではありま

せん。けれどもその「方法」が重要だと思います。

つまり「相手に分かる」方法です。

また、反対に聞く立場であるときには、分からない事については「黙る」のではなく「〇〇が分からない」と言う方が親切です。その種の常識についても確認の必要があるケースもよくみられます。

けれども、ここで注意が必要なのは、「都合が悪い事」については、とりあえず「分からない」と答えるお子さんが結構いる事です。

「なぜ宿題をしていないの？」

と尋ねると、「分からない」と言う具合です。おそらく、この子供さんの「分からない」は「本当の理由を言ったら怒られそうなときに使う言葉」ということになると思います。

また、何を答えてよいか判らず、黙ってしまう場合もあります。

「宿題を忘れていたの？それとも問題の意味が分からなかったの？」

と聞かれると何を答えてよいか分からない子供も、

「宿題があると思っていなかった。今このメモを見て思い出した」

このように、二択ぐらい（短い言葉の二択がベストです）にまとめて聞いてあげると、何を答えたらいいのか分かりやすいようです。

最後に、立て続けに、同じ失敗をした場合には、「やりたくないからやらない」というケースも多いので、その際は、宿題の内容を変えるなど、工夫してみてください。

また、私が隣にいと、すんなり問題を解き始める事も多いので、多少難しい問題や苦手な事などの場合には、「隣にいて欲しい」のかを、子供に確認した方がよいと思います。

### 家族内で注意する事

そして、親御さんをはじめ周囲の大人が、会話や、日常の場面において、適切な受け答えや守るべきルールが存在する、と言う事を教えてあげる事は非常に重要だと思います。

子供達は、案外「目から鱗」状態かもしれません。

加えて、一人っ子のお子さんや、同年代の人間関係に恵まれないお子さんの場合、どうしても周囲の大人から「優先させてもらっている」状況がよく見られます。つまり、ひたすら子供だけが話したり、会話に割り込んだりしても放置されるという状況です。

それ自体は悪い事ではないのですが、「優先される事が普通」と思っている子供たちも多いです。よって、会話は「かわりばんこ」に話すことが理想的だと教えてあげてください。

また、子供さん自身が、自分の事にしか興味がない場合もあり、相手が話した途端、視線がさまよい「全く」聞いてない感じがする場合があります。

これでは、相手が「この人と話すと楽しい」と感じるはずがありません。

それについても、たとえ、適当な質問が思いつかなくても、意味が分かれば、相槌をうってあげると言う事や、相手の言葉を聞くときに、視線を合わせると、相手は「真剣に聴いてくれている」と感じるという事を教えてあげるとよいと思います。

そのようなコミュニケーションの「超」いろはを、一つずつ「教える」と言う事が、私の指導する子供達が必要としている事ではないかなといつも感じています。

### ③手や足の静止方法（動かし方）が分からない

#### ハンターがいる？

私が指導する子供の中に、多動で、集中力が持続しにくいお子さんと言うのは確かに存在します。また学校などでは、授業中にも関わらず、勝手に動き回る子供達があります。

思うに、そのような子供達に特長的なのは、「目の動き」かもしれません。絶えず周囲を見回し、興味を引くものを絶えず探すレーダーを張っていると言う感じです。

多動ではない子供であれば、例えば黒板や先生の顔に、視線が集中し、また頻繁に動くことはないと思います。けれども、私が指導する生徒さんは、視線がさまよう分、行動もそれに伴って「不必要に動く」と言うのが、私の印象であります。

逆に言えば、「視線が先」なので、彼らが動くかどうかは簡単に見分けることができます。

要するに「動く視線が注視」したときが、彼らが「獲物を見つけ」行動に移るときです。

#### 例えるなら〇〇

このような子供達の言動に、親御さんは「何故じっとできないの！」と激怒し、悩むことも少なくないと思います。

彼らの状況を、私なりに言い表すと、「貧乏ゆすり」に似ているかな？と思います。

やらなくて困るものではないけれど、やっていないと落ち着かない。加えて、その「開始」と「停止」は無意識であると言う点です。

逆に言えば、興味を持ちさえすれば、視点が定まり、集中するので、興味を引くような「目新しさ」が大きな課題となると思います。

その際は、常に先生や親御さんと「アイコンタクト」を取ることで、視線が下がり、余分な情報を取り入れ、授業とは関係のない獲物を見つける体制になるのを防ぐことができるかもしれません。まさにそれは、彼らのための「愛コンタクト」になると思います。

#### 不器用を越えた不器用さ

幼稚園や保育園では、絵を描いたり、折り紙を折ったり、また何かを作ったりすることが多かったと思います。それは、手や指を自在に動かしたりする為の、楽しい訓練です。

また、「はないちもんめ」や「おしくらまんじゅう」やボール遊び等は大きく身体を動かす為に必要な遊びです。

それらの遊びの中で、子供達は「どういう風に手足を使うか」などを覚えていくのですが、それが上手く行かない子供達があります。

代表的なのは、はさみや、縄跳び、自転車に乗れないという不器用さです。また、注意しなければならない事柄としては、「はさみは使えるけれども、はさみでどこを切ったらよいのか」その指示自体が分からず、はさみが使えないというケースです。

これらの問題も、子供達が苦手な箇所を補うゲームなどでフォローしてあげると、「いつの間にか」「時間は掛かっても」「形はどうあれ」徐々に出来るようになるようです。

●学習について

① 「読む」事の奥深さを知る

本読みではなく「字」読み？

私が持つ子供達の中では、言葉を理解しているかどうかを見分ける為に、文章を音読させる事がよくあります。

上手に音読できれば、言葉の区切りや意味を理解していると言う事になりますし、難しければ、言葉の意味や読み方、区切り方が分からないと言う事です。

例えば次のような文章があるとします。

おとうさんはかいしゃへいった。

通常は、特に意識しなくても、「おとうさんは」「かいしゃへ」「いった」と言う具合に区切る事が出来ると思います。けれども、私が持つ子供達は、この文章を例えば、以下のよう読みます。

い  
お  
し  
と  
う  
さ  
へ  
さ  
  
い  
ん  
っ  
た  
は  
か

読んでみて、すぐに分かると思うのですが、非常に読みにくいです。私が指導する子供達の中に多い読み方が、この言葉の区切りを無視した読み方です。けれども、それは「わざと」やっている訳ではなく、どこで区切るかが分からないようです。

つまりかれらのなかでは、文はこのようにみえるようです。

ですから、「二度読んで」初めて意味が分かるということも少なくありません。つまり、音声にして、耳で聞いてはじめて「おとうさん」だと理解できるのです。よって、一生懸命読んでも、文章の意味が今ひとつ把握できない理由もここにあるかもしれません。

これも、横で毎回直すと言うよりは、子供達が「おとうさんだ！」と気がつくことを、誉めると言う方が、子供達も、邪魔されてイライラしませんし、意欲が出ると思います。

#### とびとび読み

加えて多いのが、「いきなり」行が飛ぶ事です。

わいお  
たつと  
したう  
はさん  
は  
さみし  
かった  
かいし  
ゃへ

例えばこのように読みます。

「おとうさんは かいしゃへ わたしはさみしかった」

この場合は何とか意味が通るのですが、全く意味が分からなくなる事もしばしばあります。

このように文を目で追う事が難しく、行を読み飛ばしてしまう場合は、その行だけが見えるようにして下さい。他の行を、下敷きやノートで隠しておくと、目で追うのが楽であるようです。

#### どこを読んでいますか？

お父さんは  
会社へ  
行った。



右の文章を渡しているはずなのですが、いきなり「おかあさんは 会社へ行った」と読む子供さんも結構います。

「お」がついたら、「おかあさん」と言う具合に、最初の頭だけがあっていて、他が「全く」違うと言う事が多々あります。

その場合も、決してふざけているのではないと言う事が前提で、最初の「一回は」直してあげてください。なぜ「一回」なのかというと、後に続く「おとうさん」も、「おかあさん」と読むことが多いからです。

つまり、あまりにも「訂正されすぎると」読むのが嫌になることが予想されるので、「読もうとする姿勢」を誉めてあげると、子供達も喜ぶはずです。

「訂正しないと、後に困るのでは？」と思う方も多いと思います。けれども、興味深い事に、読む回数を重ねるうちに、自然に修正されていく事が多いです。

そして、私の教える子供達の大きい特徴として、

- ・間違いは「修正されにくい」
- ・間違いは「固定化しやすい」

と言う事があります。

その事実を踏まえた上で、「間違いを指摘しない」と言うスタンスではなく、「指摘は最小限に留める」と言うことを私は大事にしています。

## ②「書く」事の奥深さを知る

### 何種類もある表記法

例えば英語ですと、アルファベットを覚えれば、大抵の文章を読むことが出来ます。

けれども、日本語では、「ひらがな、カタカナ」だけでは、文章を読むことが出来ません。

いわゆる障害を強く疑うラインですと、高学年になっても、「ひらがな、カタカナ」を間違える事もありますし、あるいは「この字はどう書くのか？」と漢字以前に、ひらがなやカタカナを真剣に思い出そうとする様子もよく見受けられます。

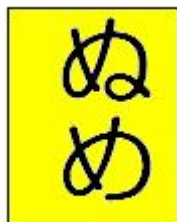
つまり、私が指導する子供達は、「記憶」に問題のあるケースが多いため、覚える事が、非常に厳しい場合が多いです。

「いつも使っている言葉だから」と言う事で、周囲の人は、まさか小学校一年生で習得すべきはずの文字—ひらがな・カタカナが覚えられていないとは思えないようです。

けれども、それを「こんな事がわからない」「変な子」と揶揄する事や、困惑するのではなく、きちんと一つ一つ教えていく必要性を感じます。

### 難しいのは似た文字

例えば、以下の文字などの区別がつきにくいようです。



最後を少し丸めるかどうかで、「全く」読みが異なりますし、意味も変わってきます。そして、重要なのは「小さい違い」です。

目で見ると言う事に弱さがある場合、この「小さい違い」を見間違える事が非常に多いです。ですから、自分が間違っている、と言う事にも気がつきにくいようです。

よって、高学年になっても比較的「マス目が大きい」漢字練習帳を利用するとよいと思います。また、「どのくらいの字を書けばよいか」分からない子供もいるので、マス目があり、区切られた箇所を書くほうが、よいと思います。

このような子供達の特徴として、名前を書いたりする箇所に、枠内に「異常に」小さい文字を書いたり、ノートに「不必要に」大きい文字を書いたりする事があります。

確かに、特に男の子のお子さんの場合、ふざけて文字を書く場合もありますが、そうではないお子さんも見ました。

よって、どれくらいの字で書けばよいのかがはっきりと分かるものを使用する事で、子供達が字を書く上での目測がスムーズにいくはずで。

またお手本は、「細い字」よりも、はっきりと分かりやすい太さのものがよいと思います。

どちらでも○？

勉強が進み、漢字を習うようになると、次のような問題が起こります。



「こざとへん」「おおざと」と言う具合に、形は同じなのに、漢字によって、使う場所が異なるものです。これも「似たものは間違いやすい」というルールにのっとり、左右が逆の漢字を書くことも多いようです。

左右を取り違えると言う意味で、高学年になると以下の文字も習い始めます。



有名なのは「b」と「d」の区別がつかないケースですが、つまり左右が反転した文字を認識しにくいと言う特徴があります。

また、より厳しいケースでは、以下のような間違いが見られます。



上下の区別がつかずに、上下が反転した文字を書いてしまうお子さんです。この種の間違いは、左右に比べて数は少ないのですが、やはり見受けられるケースではあります。

アルファベットにはこのように上下左右が似た文字が多いため、アルファベットが主流の国では、書字困難の子供達が多い点も指摘されています。

そして、このように左右や上下を間違えるケースでは、「ただ間違っただけ」でなく、何と何を間違えたのかを教えてあげる必要があります。

特に左右上下の区別がつきにくい場合には、根気よく指導する事が重要です。

加えて、アルファベットの組み合わせの仕組みがなかなか理解できないお子さんがいます。つまり、母音と子音の仕組みです。これらも含めて、書く事が難しければ、早めにパソコンを覚えさせる事も一つの方法です。そうすれば「R」と「O」で「ろ」と表記され

と言う事に気がつき、ローマ字を書けない場合でも、文字を打つ事が出来ると思います。

#### 克服の仕方

また文字を覚える際には、ただ書く、というのでは難しい事も多いと思います。

以下に紹介するのは、以前テレビで紹介されていたのですが、他の感覚と一緒に、文字を覚える事で、文字を覚えやすくなるようです。

つまり、身体を大きく使って大きく空中に書いたりすると言う具合です。そのほかには、背中などに書いてもらって、その文字を当てたり、お尻で文字をゲームもあるでしょう。

特に、えんぴつで、書くことに疲れてしまった子供達には、喜ばれるかもしれません。

勿論、「小さい違いを把握しにくい」ケースが多いので、お手本は大きいものがよいでしょう。学年が上がるにしたがって、お手本の文字が小さくなってしまいうのですが、それでは、違いが分かりにくいです。

また最初は「なぞる」事を中心にやってみると良いと思います。それによって、「書けない」「思い出せない」感じを持ちにくくなると思います。

また、パソコンやゲームを使って練習する方法もあります。今はマウスではなく、ペンタブレットなども市販されているので、えんぴつに近い形で、しかも「気分は少し違う方法」で練習できると思います。

目に負担にならない程度に、練習してみてください。

#### 難しい助詞、促音、長音

大学生の頃、中国人の先生に、以下の事を尋ねられました。

- ・私は行く。
- ・私が行く。

これらの意味の違いは何ですか？と言うものです。

生まれてこのかた、日本語が母語だと思っている私ですが、これらの違いを明確には答えられませんでした。

けれども、使う場面が、はっきりと違うのは確かです。

このように、助詞の獲得も、私が指導する子供達には難しい事のようにです。

また、「お・を」「わ・は」など読み方が同じなのに、用法が異なる場合も要注意です。

小学校の高学年でも、このルールについて確認する事も珍しくはないためです。



右の文には、間違いが4つあります。分かったでしょうか？

このような間違いも、一つ一つその理由と用法を確認しながら、修正するのが普通です。

重要なのは、「わかっている」のを前提に話をしないことです。

また一度教えても、「何度も」確認する事が必要です。そして、このような小学校一年生レベルの事柄を学習する事は、子供達にとっては、プライドが傷つく事もあるようです。

なぜなら、子供さん本人も「分かっている」と思っているためです。

けれども、「をとうさん」ではなく「おとうさん」と書くことが分かって、愕然としながらも、それらの勉強の必要性を少しずつ理解し、納得していくのが通例となっています。

また、ゲーム性があるほうが、燃えるお子さんも多いです。

特に間違い探しは、簡単にゲームが出来るので、工夫してみてください。そして周囲の皆さんも、「こんな事がわからない…」と落ち込むのではなく、せっかく見つけた分からない事柄を、勉強して「分かるようになった」という、「できた」事実を子供さんによく話してあげてください。

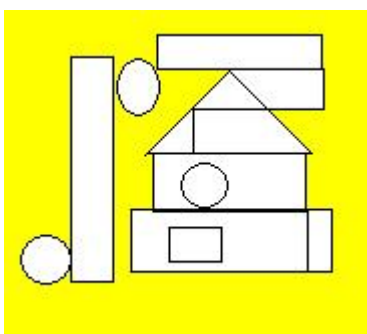
きっと子供達の中に、達成感が生まれて、勉強して良かったと思うはずです。

そうする事で、子供達自身が、「分からない」と言いやすくなり、「分からない」と言さえすれば、「分かるように指導してもらえる」という新しい考え方を、子供達の中に吹き込む事が出来ます。

ちなみに、私が指導するお子さんは「嬉しそうに」分からないということもあり、その言動については、ちょっと不思議な行動だと思う方もいるかもしれません。要するに、「本当のこと」を言うと、人間は肩の荷が降り、明るく嬉しくなるのかもしれません。

#### 書き順には目をつむる

次の絵を三十秒間で覚えてください。



では、描き取ってみてください。描き終えたら、全ての項目があっていたかどうか、確かめてみてください。また、その1分後に、同じ絵を思い出して描いてください。

おそらく、1回目に描いた絵と書き順も違うでしょうし、抜け落ちた箇所もあると思います。なぜなら、「絵を細かいところまで思い出す」のは不可能だからです。

文字を覚えにくい子供達の脳は、文字を文字として認識していない可能性を指摘されています。つまり「絵」と同じなのです。

だからこそ、書き順に問題があり、嘘字が多い事になると思います。

・絵を覚える際に、「同じ書き順」にこだわるのでしょうか？

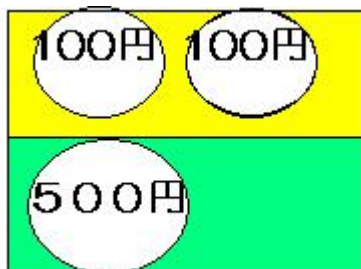
・絵を分解する際に、どういう形で分解するかなどを意識するでしょうか？

要するにどこから書いても良いはずです。そう考えると、子供達の書き順のおかしさに、目をつむる事が出来ると思います。加えて、「なぜアバウトな覚え方なのか？」を理解する助けになると思います。

### ③数の概念・単位・グラフ・計算の奥深さを知る

#### 数は難しい

私は子供の時、つまり二十数年前なのですが、妹にこんな実験をしたことがあります。



黄色い箱と、緑の箱のどちらのお金が欲しいかを聞いたのです。

すると妹は上の百円玉二枚をもらうことを望みました。いくら説明しても、五百円の方に価値がある、つまり数としては「大きい」「多い」点が理解できなかったようです。

これは、妹がまだ幼稚園前後であるときの話なのですが、妹にとっては、枚数が多い、百円玉二枚の方が、「より価値がある」と思ったようです。

#### 単位はもっと難しい

「ウチの子は、単位が苦手なのです。」

このように悩む親御さんは多いと思います。

子供達に、よく聞いてみると、それは1メートルが100センチなのか、10センチなのかがわからないということであり、単純に変換の数字を覚えていないだけと言う場合が多いと思います。

けれども、私が教える生徒さんは次のような間違いをします。

「十センチってどれくらいか手で表してみて？」

と要求すると、

「分からない」

と答えた上で、一メートルぐらいの幅を手で示します。

つまり、「単位＝物の量や大きさを表す」と言うことが理解できていないのです。

けれども、次に

「一メートルは何センチ？」

と尋ねると、きちんと100センチと答えるため、周囲は、子供が「単位」そのものの意味を根本的に理解していないと思っています。

これこそが、「わからないまま」「勘違いしたまま」子供達が大きくなる大きな理由です。だからこそ、支援学級にあるような実感として分かる教材が必要なのだと思います。

#### グラフってそう読むの？

また、グラフは何のためにあるのか？と尋ねられて、多くの人はこう答えると思います。

「見やすくするため、あるいは理解しやすくするため」

けれども、私が指導する子供達にとって、グラフは「難解」以外の何ものでもありません。なぜなら、グラフの読み方自体がわからないからです。

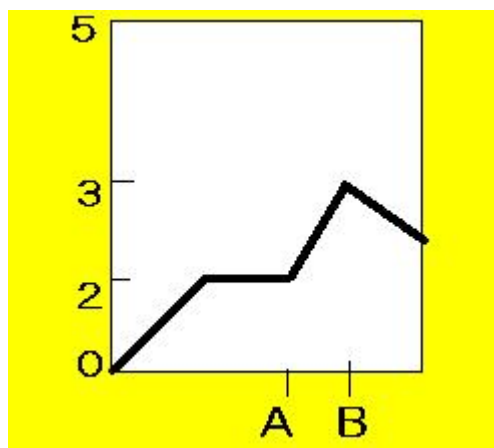
そして、グラフは「一つの軸」だけを見ていけばよいというものではありません。

最低「縦軸・横軸」を把握し、それらがぶつかる点を読むと言う事になります。

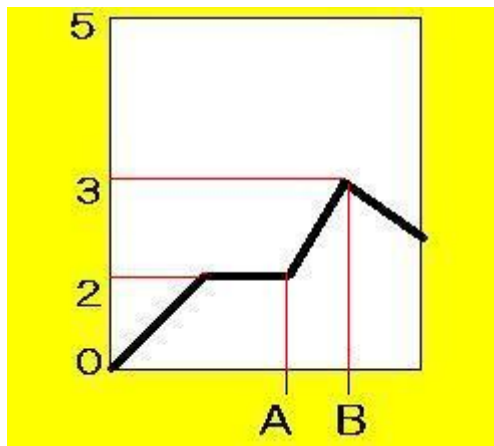
このように二つ以上事を同時にする、と言う作業も難しい場合が多いです。

面白い事にグラフが読めない子供達の、「間違ったグラフの読み方」は共通しています。ちなみに、この読み方は、中学生にもよく見られるものです。

次のグラフをよんでみてください。



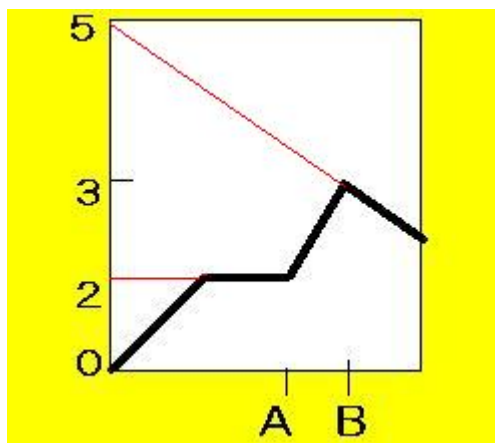
Aの時の値は、「2」 Bの時の値は「3」と言う事になると思います。グラフは、横軸と縦軸が「垂直に」交わった点を読むためです。次に通常の目の動きを赤線で表しました。



赤い線は補助線であり、この線があれば、私が指導する子供達もグラフを読む事ができます。けれども、「グラフを書きなさい」と言われて、この補助線も書いてしまうお子さんもあり、補助線はあくまでも「グラフを読むときに」使うものだと教える必要があります。

さて、次に表すのが、グラフのよめない子供達の「グラフのよみかた」です。





どうでしょうか？かなり斬新ですが、一様、彼らなりに、考えた結果であり、理にかなっている気もします。ちなみに、Bの値を「5」と答えるのが普通です。

重要なのは、Aの値は正解するため、先生をはじめ周囲の大人たちは、「グラフの読み方」自体が分からない、とは思っていないということです。

なぜなら、グラフを「見れば分かる」この値の読み方に躓くと言うことが、想定されていないためだと思います。

よって、「見れば分かる」事柄でも、「正しいよみ方」だけを示すのではなく、「誤ったよみ方」を示す事により、子供達の誤解を解く事ができると思います。その誤解は、あるパターンが見られる事が多いので、一人の子の誤解を、クラス全体に生かす事は、非常に重要であると思います。一見して、簡単な事柄ほど、きちんと確認する必要性を感じます。

ちなみに、折れ線グラフは四年生で習います。そして、この四年生というのは、分数や少数も出てきて、一気に算数が「算数らしくなる」時期です。

障害とはいえないまでも、中学生の中には、「四年生の頃から、算数が分からなくなった」と言う子供もおり、その言葉の通り、分数や少数を上手く扱えない子供達があります。

またグラフや計算は、理科にも多く出題され、社会でも図表を利用して、物事を考察するということが難しいケースもよく見受けられます。

算数に躓いた子供達は、他の教科も躓いてしまう、と言う事を実感として認識できるよい例であります。

### 足し算・引き算のコツ

加えて、算数が分からない子供達が躓いている単元の代表は、足し算・引き算です。

それ自体は、小学校一年生で習うのですが、これが分からないと、学年が上がっても、苦労する事が予想されます。

「計算」の宿題でさえ、四苦八苦な状態である事も珍しくありません。そして、繰り上がりや、繰り下がりが出てくると、もうお手上げ状態になるようです。

思うに、子供達が計算できない理由は、「十」を越えてしまう事だと思います。

逆に言えば「十」を越えさえしなければ、ぐっと理解しやすくなるという事です。また、一部の例外を除いて、「十」の数までは、自分の手で間に合います。

その点の指導を強化すれば、子供達の「算数人生の幕開け」は違って来るはずです。

子供達の足し算は、とにかく「1ずつ足す」と言う事が主流です。当然、以下のような計算では、非常に時間がかかります。

$$\begin{array}{r} 5 \\ + 9 \\ \hline 14 \end{array}$$

※5から1ずつ足す方法  
6,7,8,9,10  
11,12,13,14

この方法では、十本の指では間に合わない事もあり、「どこまで足したか？」と言う事もわからなくなる事も多いです。よって、何度も何度も計算で指を使う事になります。

次のような方法を使うと、楽に計算できます。基本的に「十」を作る事ができるお子さんであれば、習得する事は可能です。

$$\begin{array}{r} 5 \\ + 9 \\ \hline 14 \end{array}$$

①小さい数から1もらい  
大きい数を10にする  
②小さい数のあまりを  
一の位に書く

1あげる

1の位に書く

一見すると「当たり前」なのですが、とにかく一つずつ足す、と言う戦法のみで頑張ってきたお子さんにとっては、「目から鱗」となるようです。

計算の強化の為に百増す計算に挑戦する方もいると思います。その際には、「数字の並び

が同じ問題を」コピーして使ってあげてください。そのほうが、「少しずつ計算が速くなる」と言う達成感を味わえるはずです。

また、「引く」と言う概念自体は分かっている、大きい数から引き算する事は、特に時間を要します。

次に表すのが、私が教える子供達の引き算の方法です。

$$\begin{array}{r} 15 \\ - 9 \\ \hline 6 \end{array}$$

※15から9を引くため、15を手で表す事ができずに、断念する

とにかく十であれば手で表す事ができる事を踏まえ、以下のように計算する事をお勧めいたします。

$$\begin{array}{r} 15 \\ - 9 \\ \hline 6 \end{array}$$

①15を10と5に分解  
②10から9をひくと1  
③②で余った数の1と①で使わなかった5を足すと6

●●●●●●●●●●  
●●●●●●●●●● 10-9=1  
1+5=6

おそらく引き算が苦手なお子さんでも、十から数を引くその答えは、割とすんなりとでてくるはずです。

その事を利用して、大きい数を十といくつになるかを考え、「必ず」十から引くようにします。

ちなみに、これらの「十」を基礎とする考え方は、私自身がそろばんで習得したものです。そろばんは、実際に玉が動く為、手の代わりにもなり、数のイメージをしやすいものであります。

おそらくそろばんを習う上で、最初の関門が「五を表す玉=五玉」があるということだと思えます。

けれども、それさえクリアすれば、あとは楽に計算できると思います。

計算に自信がないお子さんには、指の代わりに「玉が動く」そろばんはお勧めです。

また、九九が分からない場合も、百増す計算がお勧めです。やはり「同じ」問題でやってみてください。きっと成果があるはずです。

### 文章題はお手上げ？

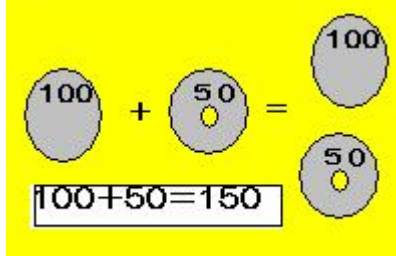
算数が苦手な子供達が、「非常に」大変な思いをするもの…その一つが、文章題です。計算も危うい子供達が、「やっと」たどり着いた先も、また「大変」と言う事で、一気にテンションが下がる事も珍しくありません。

また、例えば、掛け算を習っているときには、「掛け算の文章題のみ」が出題される為、あまり迷う事もないようです。けれども、これが、「+-×÷」全ての要素がある文章題ですと、もうお手上げの状態になるようです。

まずは、子供達の分からない具合を把握する事からはじめてみてください。

また、私は「+-×÷」の基本概念から教えています。それは以下の通りです。

妹は今100円持っています。姉に50円もらいました。妹は今何円持っているのでしょうか？



100 + 50 = 150

基本的に、この四則の概念を教える際には、お金を用いると分かりやすいようです。なぜなら、「増える」「減る」が実感として理解できるからだと思います。

また、「+-」は比較的理解は出来るようです。問題は、以下の「×÷」です。

まずは、「×」についてですが、これは、「同じ数ずつ増える」と言うのが掛け算を使う場面となります。「同じ数ずつ」「増える」を理解する事が非常に重要です。割り算は、「分ける」が基本ですが、「同じ数ずつ」「減っていく」と割り算になります。

姉は、毎月50円ずつ3ヶ月間貯金しました。全部でいくらかになるでしょうか？



50 + 50 + 50 = 150  
50 × 3 = 150  
※50円ずつ増えるので「×」を使う事ができる

妹は150円持っています。それを毎日50円ずつ使っていくと思っています。何日でお金がなくなるでしょうか？

→同じ数ずつ減る＝「÷」



150 ÷ 50 = 3

掛け算は比較的分かりやすいようですが、間違いとして、五十円に三を足すと言う事をする子供がいます。また、割り算は「分ける」以外の表記の場合に躓く事が多いです。

同じ数ずつ減っていくと、割り算を使うと言う事を教えてあげてください。

四則の使い方は非常に重要です。中学生でもあやふやな事が多いので練習してください。

## 第二章 今あるサポートの問題点を解く

### ●子供達が受けているサポート

#### ① 通常学級のサポートでは何が問題なのか？

#### 邪魔な存在？

「伸び悩む子供達は、学校の先生の保護を受けられるか？」

この問いに関して、私はこうお答えすると思います。答えは「ノー」です。

どちらかと言えば、発達に問題がある子供達は、「問題ばかりを起こす存在」になっており、先生によっては、そのような子供達を「邪魔な存在」と受け止めている場合もあると思います。あるいは、先生の指導力不足を言われかねないほど、子供達が理解できていないことが多いので、「先生の自信を失わせる存在」であるかもしれません。

そうすると、どうなるかと言えば、「怒鳴られる」あるいは「無視される」と言う事が、子供達の一般的な扱われ方のようなようです。

少しマシな先生でも、「どうしてできないの！」と言う事で、子供や親御さんに詰め寄る事があるようです。この方法も、「どうして出来ないかを本人に尋ねる」という点において、何の解決にもならないという結果を生むようです。

#### 本当に気がつかないのか？

私から見て「発達障害の疑い」が明白でも、その事柄について学校の先生が親御さんと話をし、また発達診断を受けるよう勧められたケースは、ほぼゼロです。

また、留学や親御さんの都合で、外国にて教育を受ける機会がある子供さんは、一ヶ月前後で、発達障害の疑いについて「外国で」指摘される事もあるようです。このスピード感は、日本ではない事でしょう。逆に言えば、一ヶ月みれば分かるのが発達の問題です。

私の経験上言える事として、子供達に、特に学習面のサポートが必要かどうかを簡単に見分ける方法があります。しかも「見て」「簡単に」分かる事柄です。

それは「鏡文字がある・左右のどちらかが欠損した字」の有無です。

思うに、子供達の理解度の悪さと、これらの文字は強い関係性があると思います。そして、子供達が、学校の先生に提出したプリントや作文や日記などを目にする事がありますが、何かしらの「気づき」がある事が多いです。

しかも、その間違いは「一年に一度」と言う頻度ではなく、一つの課題に「何箇所かの」間違いが「私の目から見て」確認されます。よって、見落とすと言う事はないと思います。

おそらく、学校の先生はそれをみて、放置している可能性が高いです。

なぜなら、「厄介」だからです。

子供達の発達障害の可能性を指摘すれば、必ず親御さんとの間でトラブルになります。

すんなりとその可能性に耳を傾けると言う事は、私の経験上ありません。逆に、「その発達障害の可能性が」ほぼ百パーセントであるほど、親御さんの抵抗は凄まじいものがあります。なぜなら、「指摘されるまでもない」為です。

## 概念の違い

また、子供達の間違いが、周囲が「見て分かる」物だけならばよいのですが、多くの場合、概念自体が分からない（これは、左右や数の概念も含みます）あるいは勘違いしているということが多いので、それはどうしても集団の授業では見落とされがちになります。

その代表的なものが「言葉の意味が分かっていない」という間違いです。

毎回その子供だけに質問するわけにもいかず、また「まさか」と言う言葉が分かっていない事も多く、個々に違う間違いもあるので、類推するのも難しいと思います。

よって、その「確認作業」を学校に期待するのは、方法としては賢いとは言えないでしょう。そして、幸いな事に、これらの確認は、ご家庭で、十分出来る作業です。

「子供は理解できている」という思い込みを捨てて下さい。面倒でも、一つ一つ確認していく事により、子供達の分からない事柄が、蓄積を防ぐ事ができると思います。

## 問題点を共有する

日本の学校では、担任が得た情報について、「必ず」上の学年の先生に報告する義務はありません。あくまでも任意であるものです。

そして、親御さんが必死に伝えた事柄も、周囲の先生に「必ず」伝わるとは限りません。それもやはり「任意」であるためです。もしも必ず伝えて欲しいのであれば、そのように確認された方が無難です。

よって、前の学年の先生が気づき、改善が見られた事柄についても、先生が変わると、上手く行かない、と言う事が当然出てくると思います。

特に、発達に問題があり、学習に苦慮している子供達の情報は貴重です。学校の先生の「何か変？」と言う印象は、「毎日」見ているからこそ感じる事柄であり、また親御さんがいない場面での子供達の言動を知る、非常に重要な要素となると思います。

故に、親御さんにとっても、学校にとっても、このような情報が、「確実に伝わらない」現状や、非常に曖昧なシステム自体も、変えていく必要があると思います。

なぜなら、その情報があれば、打つ手を考える事が出来る為です。

そして必要であれば、私のような立場つまり学校以外の教育機関にも情報を開示できるシステムが望ましいと思います。加えて、私が必要に応じて、学校に出入りできるようになる事も、望ましいです。子供達を「一対一」で得た情報をお渡しできると思います。

また、そのような情報を、効率的かつ包括的に検討できる検査及び観察が「発達診断」です。この診断では「何が弱いのか？」だけでなく、「どういう方法ならば一番分かりやすいのか？」と言う事も検討できるようになっています。

親御さんにとっての死の宣告を、周囲の人が勧める理由は、ここにあると思います。

それこそが、「発達診断」の大きい意味だと私は考えています。

そして、診断を受ける事で、親御さん自身が、子供達が向き合っている現実を見るという事も、発達診断の重要な要素だと思います。また「子供達は、何が分かっていないのか」を把握していない人に指導は無理です。よって、家族だけでは、子供達のサポートは難しいと言う事を受け入れるためにも、この発達診断は必要不可欠である気がします。

## 最低限のルール

発達に問題を抱えた子供達を抱える親御さんが望む事…それは「普通学級への」在籍である場合があるでしょう。これを希望する為に、発達診断を受けたくないという方もいるかもしれません。その理由は、発達の問題が明らかになれば、支援学級を勧められる可能性があるためです。

私は、発達に問題がある子供達が、通常学級に在籍する事に異論はありません。

けれども、そこには最低限の指針を設けるべきだと思います。

それは、「静かに、他人の邪魔をせず座っておけるか否か」という指針です。

子供達の集中力は、発達に問題が無くても、基本的に、そんなに高くはありません。

その中で、突然立ち歩き、大声を発する子供達がいて、周囲の子供は、先生の言葉に集中できるでしょうか？それは非常に難しいと思います。

## 両者に配慮を！

発達に問題がある子供達が、通常学級に在籍し勉強する権利と同じ程度に、また、発達に問題が無い子供達が、安心して学べる環境も必要だと思います。

この辺の権利が、発達に問題がある子供に「変に」偏っているのが、日本の教育のような感じです。私の印象では「とりあえず」通常学級に在籍する例が多いと言う事です。

ですから、私が指導を開始した時点で、「何も」身についてない様子もよく見受けられます。また、宿題についても、他の子供と同じものを形だけ出されている印象です。

例えば、欧米では、一人で静かに、そして落ち着いて授業を受ける事が難しい子供には、補助の先生がつく例もあります。そうする事で、クラスの運営は、補助がないときよりは、比較的スムーズに行くでしょう。

一方で、日本の現状では、「一対一」で補助が付く事はまれですし、難しいと思います。けれども、「静かに座っておく」という事を、できれば就学前に「先に」支援学級で学び、それができると確認されてから、通常学級で学ぶ事も出来るはずです。

「ウチの子は静かに座っていられる」と思う親御さんも多いでしょう。

けれども、「親の前」とそのほかの場所では、「全く」違った行動を取るお子さんが多いと言うのは、実感として言えることです。

つまり、家では静かなお子さんも、学校では、何らかの言動で、「静か」とは言いがたい状況があるケースも見受けられます。

- ・学校の先生が、話をまともに聞いてくれない。
- ・近所のお母さんが、わが子や家族を目の敵にする。

そのような場合は、子供の状況について理解を得ると言うよりは、「過度に」学校や周囲の人に依存している可能性が高いです。つまり相手に多大に我慢をさせている状態です。

これらの経験をした親御さんは、我が子の「学校での様子」に真剣に耳を傾け、現実を受け止め、さらに行動に移して「全体を見て」対処する姿勢が望まれます。



## ② 支援学級でのサポートは何が問題なのか？

### ガイジって何？

親御さんの中で「ガイジがね」と子供が話し始め、対応に苦慮した方もおられるかもしれません。

一樣、説明しておきますと「ガイジ＝障害児」の意味で、子供達が使う隠語です。

ちなみに、この「ガイジ」は、いい意味で使われる事はありません。

「ガイジがあんな事をしていた」

と言う具合に、そのお子さんから見て、「おかしい」と思う出来事を話すのです。

「おかしい」とはつまり、「通常はしない事をする」あるいは「通常はできる事が難しい」と言う事なのですが、とにかく子供達の目は、その障害を抱えた子供に集中するようです。

そのような会話が普通に成立するのはつまり「無理解」からだと思います。

けれども、何らかの発達障害がありながらも、通常学級に在籍している子供を持つ親御さんは、一般的に我が子の障害を「周囲には分からない」程度だと思っておられる場合も多いです。また、わが子がどのように周囲に受け止められているか、関心がない、あるいは把握していない場合もあるでしょう。

反対に、「授業中に教室を動き回る」などのように、行動のおかしさが明白な場合、親御さんが「わが子は教室にいさせてもらっている」と受け止め、子供が揶揄されたとき、学校や先生に積極的に相談に行く、あるいは、抗議する事もないというケースも見受けられました。

どちらにしても、「正しい理解と対応」を強く望まれるケースが多いと予想されます。

### 誰の為の学級か？

基本的に日本の学校では、支援学級がまだまだ「重度の」子供達の為に存在するようです。ですから、「軽度」と言われる子供達が、居心地が悪かったり、サポートが不十分だったりする事も多いようです。よって、「軽度発達障害」の子供達が、支援学級に通うというのはまだまだ一般的ではない印象です。

そして、私が指導する子供達は、基本的に

- ・一回で習得できる量が「非常に」少ない
- ・せっかく習得した事柄でも「すぐに」忘れる

と言う特徴があるため、ほぼ、毎日のように、「個別に」サポートを受ける事が望めます。けれども、その環境にいる子供達を、残念ながら、私自身は、まだ見た事はありません。

また、私が指導する子供達は、「イメージで」や「言葉」で物事を認識する事が難しい為、

- ・実際に模型を使う
- ・絵や図にしてみる

という具合に、様々な教材を使うと、意味が分かりやすくなる事も少なくありません。

そうなると、家庭でのサポートでは不十分であり、またその模型や教材を、ご家庭で、買おうとすると、「非常に高額で」とても手が出せないと言う事もあり得ると思います。

よって、教材を貸し出し、個別利用が可能なルールがあれば、非常に喜ばれるはずです。

#### 名前の問題

また、「支援学級」という場所には通いたくないけれども、「言葉の教室」には通いたい、と言う事を普通におっしゃる方もいます。

「言葉の教室」とは、支援学級の中でも特に「言葉」について言語聴覚士の方等が指導してくれる場所ですが、基本的には「支援学級」です。

けれども、その名前が違っただけで「通いやすい」イメージになるようです。

加えて、言葉の遅れが明白な場合でも、この「言葉の教室」の存在を親御さんが知らないケースも目立ちます。

以前、私自身が、県の教育委員会に問い合わせをしたときに返ってきた返答は、以下の通りです。

「生徒本人の親御さんから申し出がない限り、こちらから（つまり教育委員会をはじめとした学校関連の機関から）言葉の教室などの存在をお知らせする事はありません。」

一瞬、何を言われたのか分からなくなって、戸惑ったのですが、基本的に「親御さん自身が、わが子に何が必要なのかを把握し、その上で、支援機関を自分で調べて、自分で申し込みをしない限り」そのようなサポートは受けられないようです。

また、学校の先生に後日、この教室の存在を問い合わせると、学校の先生も知らなかったというケースもありました。

何のために「言葉の教室」を作ったのか？という点において理解に苦しむのですが、それが、新しく特別支援の体制が作られ、特別支援が始まっているはずの今のお役所の現状のようです。

ですから、その「重要な情報を知らなかった」という事がないためにも、家族会などに参加し、「先輩の親御さんから」新鮮で確実な情報を得る事も一つの方法だと思います。

### ③ 他の専門機関でのサポートは何が問題なのか？

#### プラチナチケット

発達に問題を抱えた子供達が通う場所としては、代表的には、医療機関、NPOなどの私塾などが考えられると思います。

けれども、この専門機関に通う事ができる子供達は幸せかもしれません。

なぜなら、外部サポート機関は、数が絶対的に少ない為です。よって、そのようなサポートを受けるには、「プラチナチケット」を手にしなければならない、と言う事になります。

プラチナチケットを手に入れるには、基本的に優先順位があります。

それは、その障害の重さ、あるいは、現状の厳しさが基準となるようです。

逆に言えば、軽度であればそれはそれでよい事です。けれども、専門のサポートが受けにくくなるという意味で、また「家族だけで」孤立する状態が生まれやすい面があります。

#### 大学発

大学生や大学院生が主として教える団体もあります。

その中で問題なのはその経験の程度やシステムです。考えてみますと、医学生に、いきなり大変なケースを任せるでしょうか？答えは「ノー」です。

たとえ、学生があるケースを持ったとしても、あくまでも、教授や先輩の指導の下に動く事になり、どうしても効率が悪くなります。また判断も遅くなるでしょう。

基本的に、発達に問題を抱えた子供を持つ親御さんのサポートは、様々な矛盾を抱えたものが多い

- ・状況がよくなって欲しいが、障害は認めたくない。
- ・サポート施設に通っている事を周囲に知られたくない。

これらの事柄や、親御さんの精神面のサポートや学校との関係性も含め、学生が上手にサポートできるのかは疑問が残ります。

確かに、学生にとっては、よい経験になる事柄でも、双方の同意や、方向性を常に確認し、本や教材を超えたシステムと方法論を「全国共通」で確立する必要性を感じます。

また、大学では、知的障害や聴覚・視覚障害の子供達の教授が充実していても、LDやアスペルガーなど最近知られてくるようになった分野は、まだまだ弱い印象です。

加えて、そのような子供達を学校で指導できる資格、つまり特別支援関連の資格を取る院にもなぜか「制限」があります。それは、「教師」等の資格がないと院の受験資格もないというものです。

大学が無理なのであれば、早急に外部団体が、そのような先生を要請する場を作るべきだと思います。ちなみに、大都市圏では、NPO団体が、独自にサポートの先生を養成し、学校に排出しています。それによって、サポートを必要としている子供達を待たせたり、あるいは、孤立させたりする事を防ぐ事が出来ると思います。

## 料金はバカ高

ところで、皆さんは、家庭教師に指導してもらった経験はありますか？

基本的に、以前は、家庭教師という存在は、お金持ちの家に入出入りする人のことだったように思います。けれども、現在は、塾と同じように、一般的に利用される選択肢の一つになってきたと思います。

その中で、塾と大きく違う事柄の一つが、「料金」ではないでしょうか？

家庭教師という存在は、どうしても「個人」を指導する為、料金が割高になるという問題があります。

また一般的なご家庭では、「受験のときだけ」家庭教師を雇うと言う具合に、「一時期のみ」限定で利用される場合も多いと思います。だからこそ、「割高な」料金にも対応できると思うのです。

けれども、私がサポートする子供達は、基本的に「日常的なサポートがあつてこそ」やっていけるというのが普通です。

それにもかかわらず、発達に問題を抱える子供を専門にサポートする事をうたっている機関の料金は「かなり」高い印象です。また、学生が教える機関でも同じ傾向です。

ちなみに、私のご家庭から頂いている額の「二倍強」と言うところもありました。しかもこれが、支援をうたう専門機関の通常料金という印象です。

実際に、ある児童精神科医の先生から「子供達の指導を頼むかもしれません」と言う事を申し出られた事があります。理由は「安い」為です。

断っておきますが、私が頂く額は、「一般の家庭教師の枠内では」通常の料金です。

そして、本当にサポートが必要な子供達に「高い」料金を設定する、その意図が私には分かりません。

おそらく「専門性がある人から教わった付加価値料金」と言う事なのでしょうが、それよりも優先すべき事柄がある気がします。

## 場所の問題

そして、子供達がサポートを受ける場所は、学校が一番よいと思います。

なぜなら、「毎日」行くためです。

そうでないならば、「通いやすい」場所にある必要があるでしょう。けれども、善意の支援団体であっても、金銭的に、「町のど真ん中」に施設を作る事は難しく、また、「沢山の場所を」勉強場所として確保する事も難しい事が予想されます。

そんな時、私が思うのは、空き教室や、公民館を利用する方法です。

今の時代は、少子化により、空き教室がある学校が普通だと思います。

よって、毎年審査し、チェックが入る事が前提で、外部の団体と手を組み、運営する事は出来ると思うのです。また、指導者が学校を巡回すれば、多くの子供を指導できます。今は「子供が施設に通うのが普通」であり、親子共に負担が大きいです。

そのように工夫をする事で、金額の問題も、また通学の問題も少しは光が見えてくると思います。

#### ④ 専門機関以外でのサポートは何が問題なのか？

##### 役割は果たしている？

学校などから既に「発達障害の可能性」を指摘されているけれども、それを納得できない親御さんが取る行動の一つに、「家庭教師を雇う」というものがあります。

なぜなら、「発達障害」を受け入れられなくても、子供達に「個別のサポートがいる」と言う事は、子供達の言動や、普段のテストなどから、痛いほど分かっているためです。

けれども、この方法には大きな落とし穴があります。

そもそも、子供達の発達の状態は、特に最初の段階では、サポート側に詳しく伝えられる事はありません。つまり発達に知識がない先生も、指導する可能性があります。

冷静に考えれば、子供達の発達の問題を「明確に、詳しく」伝えた方が、先生が指導しやすいのは確かでしょう。

けれども、「発達の問題を認めたくない」親御さんにとっては、「実際に、指導に効果がある」と言う事以上に、「サポートをつけた」と言う事が優先される事が多いです。

だからこそ、いわゆる「強く発達障害が疑われる事実＝重大な情報ほど」隠す傾向がある事も珍しくありません。

##### 家庭教師の対応

実際に聞いた話ですが、全く勉強ができないお子さんに付いた方で、その後、全く成績も伸びず、塾を紹介した家庭教師がいるそうです。

おそらく、何らかの発達の問題がある可能性も考えられますが、その先生が出来たのは、「自分以外の誰かを紹介する」と言う事でした。

けれども、これは責められない事だと思います。

なぜなら、やはり発達に問題がある子供達を指導する事は、非常に厳しいためです。

何の知識もなく、また正確な情報も得られないままでは、家庭教師のほうが、つぶれてしまうでしょう。

また、ご家庭側から、「成果が上がらない」家庭教師を、次から次に首を切るというケースも聞いた事があります。

個人の教師を切るだけでなく、様々な家庭教師の業者自体を渡り歩く事もあるようです。

その行動そのものに意味があるのかは疑問が残ります。一方で、指導できる人が限られている、というのは現実としてあると思います。

##### 協力体制

上手く家庭教師をはじめとした指導者を見つける事ができ、また、ご家庭での様子を把握していても、それを生かす事ができなければ意味がありません。

ちなみに、私は何度か、学校の先生と話し合いの機会を持とうと思った事があったのですが、はっきり申し上げまして、大きく失敗しました。

その原因の一つは、学校の先生に「敵」「格下」とみなされたと言う事です。

どうやら、その学校の先生は、「自分ひとりの力で子供が伸びた」と考えていたらしく、親御さんや子供から私の存在を聞かされると、途端に気分を害したようです。

気分を害しただけならよいのですが、はじめたのは、私への攻撃です。

加えて、許せなかったのは、子供への攻撃です。つまり、わざわざ、その子だけに「難しい」問題を出したり、不必要な補習に呼んだり、せっかく「できる」と思い始めた子供の行動を、ことごとく邪魔しようとする様子が見られた事もありました。

せっかく共有したいと思っていた情報も、伝える機会を失い、とても失望した事を覚えています。また、子供は、担任に頑張りを認められなかった事に困惑していました。

その時は、親御さん自身が、学校と「対峙」する事を望んでいませんでした。よって、私が学校に赴く事もなかったです。その時、話し合いに呼ばれたら喜んで参上しました。

考えてみますと、「誰が子供を伸ばしたか？」と言う事はそんなに重要ではないと思います。それよりも、「どうやって、何がよくて子供が伸びたか？」を研究し、生かしていくほうが、その学校にとっても、私にとっても有意義だったと思います。

なぜなら、「サポートが必要な子供」は、私の生徒さん以外にもすべての学年において、「複数人」「同じ学校に」「同時に」在籍している事が確実である為です。

#### 一番下？

前の文章にあるように、学校の先生が私の存在自体を「気に入らなかった」のには理由があります。それは、私の身分が格下で、いわゆる「認定がない」「組織ではない」立場にある事も大きいと思います。教育業界には、以下の「見えない」序列があるのが普通です。

医者・教授 → 学校の先生・支援学級の先生・カウンセラー → 塾 → 家庭教師

特に右の序列が書いた表があるわけではありませんが、力関係で行くとなると思います。ちなみに私がいるのは「最下層」となります。

よって、子供達の勉強においても、加えて家での様子や親御さんの希望など、詳しく把握している家庭教師という存在ですが、その力や情報が、上まで届く事はありません。

なぜなら、その機会を与えられないからです。

それによって何が起こるかと言えば、今の専門機関では「親が困っている事のみ」を優先させる傾向がある印象です。学校が困っている事、まして家庭教師が困っている事は、考慮にすら入らないのが現状です。また、親が望んでいなければ、診断もしないようです。無論、告知もありません。告知されない事で、親御さんは、現実逃避が可能となります。

全く認識が違うのに、親御さんが、指導継続をなお望む傾向があります。私が辞めると、親としての責任が増え、責める相手もおらず、現実を見る必要に迫られる為でしょうか？一方で、私のような立場の存在の必要性を強く感じる人もいます。

それは、「学級運営に人手不足と役割の分担の必要性を強く感じる」学校の先生です。「あなたのような存在がいるだけで、クラス運営や子供達は変わっていたかもしれない…」この種類の言葉をもらえただけで、また少し頑張れるかなと思います。

●親御さんが受けているサポート

① 学校との連携では何が問題なのか？

最も信頼できない？

私が伺うご家庭において、学校との関係が「良好」と言う事は一度もありませんでした。その原因としては沢山あると思うのですが、要するに「双方が子供の責任をなすり合う」と言う構図があるからだと思います。

つまり、学校側は、  
「親の育て方が悪く、子供ができない事を受け入れず、把握していない事が多い」  
と思っている様子が伺えますし、またご家庭では、  
「学校は助けてくれない。学校のせいで、わが子が、学校や勉強が嫌いになってしまった」という不満をあからさまにする事も多いです。

では、両者の言い分は、どちらが間違っているのでしょうか？

私の印象ですと、「どちらも」間違っていると思います。なぜなら、両者の考えの下に、指導されている子供自身が、「どうみても」よい方向に向かっている訳ではない為です。

つまり、私が指導するタイミングは、子供達の人生において、勉強面及び人間関係において「最悪」の時を迎えた場合も少なくありません。

だからこそ、親御さんは、わが子をもてあまし、誰でもよいから呼ぶと言う感じです。

責任回避の姿勢

また、人間は責任を回避しようとするときには、必ず「やましさ」があると思います。つまり、自分の子供の事柄について、親に責任がない事など一切ないと思います。けども、最初に伺う段階で、この責任を感じ、尚且つ、親としての責任を負おうとする親御さんは、非常に少数である印象です。

ですから、親御さんが話す言葉は、最初は「周りの人が悪い」という話ばかりです。

けれども、時間がたち子供達の「最悪な期間」が終わりを迎える頃、やっと親御さん自身の失敗や後悔を話される事が普通です。よって結局のところ、「みんな悪い」と言う事実を如実に示していると思います。

つまり、学校では、「問題児」として子供を敵視する形で対応したかもしれませんし、また、家では度重なる問題行動を、「黙認」「黙殺」していたケースもあるでしょう。

そして、私が「勉強」だけではなく、躰のラインも指導する事で、状況が改善される事が多いのが普通です。つまり、家でやるべき教育がなされていないという事実にも、何度も向き合ってきました。よって、学校だけが悪いということではないと思います。

逆に、学校が子供達の「明らかな」言動のおかしさや学習のつまづきを放置するのも、よくあるケースです。これについても、「分からないのが前提で」教えると少しずつ理解していくと言うのが通常の道筋です。

## 学校での情報

考えてみますと、子供達は一日の大半を学校で過ごします。

よって、そこで上手くやっていけるか否かは、非常に重要な意味を持つと思います。そして、家との大きな違いは、「家族以外の他の人がある」と言う事です。

家の中では、ある程度大人の「目」が行き届きますが、学校ではそれが難しい事も事実です。なぜなら、基本的に、一つの教室に先生は一人であるためです。

その中で、子供達が取る言動が変わってくる、というのは十分予想されるものだと思います。

それを踏まえた上で、きちんと状況を把握し、学校での様子を聞くべきです。そうすれば、いわゆる親御さんが全く予想していなかった事実を聞き出せると思います。

その中で親御さんが「それはありえない」と思う事もあるでしょう。

けれども、「ありえない」からこそ、家族から見過ごされてきたのであり、学校との連携がとれない最大の理由だと思います。

予想できない、受け入れられない事柄ほど、真実に近いというのが私の印象です。

ですから、まずは、学校の情報を「受け入れる」姿勢がまず望まれると思います。そうすれば、必ずさらなる情報をもたらしてくれる人が現れるはずです。

それこそが、子供達の学校生活に希望をもたらす、第一歩となると思います。

## 不審に思ったら

私が指導する子供達は、基本的に自分の感情を隠す、と言う事は難しい場合が多いです。よって、「分かりやすい」ともいえます。

その少しの変化を見逃さない事が、様々なトラブルをお子さんから聞き出すきっかけとなると思います。少数ですが、表情が「ない」場合もあるのでその際も言動が重要です。

例えば、以下のようなものが代表的な「サイン」です。

- ・いつも以上に、扱いにくくなった。
- ・友達の名前が変わった。
- ・全く話さなくなった。

最後の項目は理解できない方もいるかもしれませんが、基本的に状況が厳しいほど「話さない」事もあると思います。なぜなら、自分がそのような厳しい状況にいる事を、親御さんに知られたくない事もあるでしょう。また、物事を認知する力が弱い場合「なぜトラブルにあったのか」それ自体が分からないというケースもあります。

よって、まずは、周囲に話したほうが早く助かる、と言う事を教える必要があります。

どちらにしても、子供さんの様子を把握する事は、親の努めである事は間違いありません。ただ親御さんにも何らかの発達障害の疑いがある場合、子供達の表情や様子に気がつきにくい場合や、「問題」を問題として認識する事が難しいと言うケースもあります。



分かっている！は本当か？

また、私がお会いする親御さんに多いのは、「自分は一番よく子供の事を分かっている」というものです。

確かにそれは否定しませんが、それでも物事が上手く進まないのであれば、姿勢や視点を変える必要性はあると思います。

子供から聞いていると思っている「事実」も、それはあくまでも一つの視点に過ぎません。質問の仕方を変えてみると、「押し黙る」子供達がいるかもしれません。

学校にいちいち問い合わせをする、と言う事はなるべくなら避けたほうが賢明かもしれません。なぜなら、それは「子供とのコミュニケーションが出来ていない」と言う事を露呈する事になりますし、学校の先生も四六時中、子供と一緒にいるわけではありません。

おそらく、深刻なトラブルほど影で行われるのが当然です。

「これ、お母さんに言わないでね」

特に男の子の場合に多いのですが、極端に母親に自分の言動を知られる事を恐れる、または過度に嫌がる場合があります。そしてそれは非常に多い印象です。

しかもそれは、「私が聞いても」親御さんに怒られることとは全く思えない事柄です。

逆に言えば、私が怒る事はないと思っているからこそ、子供達は話をするのだと思います。また、私は「怒る」事はないですが、「注意」や「確認」はします。

「〇〇はしていないよね？分かってる？」と尋ねると、

「うん、分かっている！」

と言う具合で、きちんと返事をするのが普通です。

「問い正す」「尋問する」と言う事を越えて、子供から、情報をいかに引き出すのか、その技術を学ぶ方が賢明であると思います。また他人に対して、我が子の情報を頼るよりも確実であると思います。

そして、「子供がやる事に対して、何でもかんでも怒る」と子供達に思われている親御さんは、「怒る」をやめる事が先決です。「やってはいけないこと」をきちんと教え、子供に確認する技術を学んで頂ければ、親子ともにストレスが減ると思います。

また私が大いに参考しにしているのは、親御さんの「目」です。それによって私は指導方針を決め、子供達の問題の全容を推測します。

けれども、親御さんだけがそれをやろうとすると、「その目」は、十分に生かされていない印象です。つまり、整理されていない面や、点と点が結ばれていない印象を受けます。

また、残念ながら、「同じもの」をみても、緊急度合いを読み間違える可能性や、根本原因を間違える事が多い印象です。いわゆる保身が働く事が多いからかもしれません。

是非、今一度、子供達の様子を掴み、「複数の立場の目で」検討してみてください。

## ② 家族間の連携では何が問題なのか？

### 男親の弱さ

お父さんとお母さんがいて、どちらが、現実を見ているのでしょうか？

これは、特に最初の段階では、かなり高い確率でお母さんです。

一般的なご家庭では、お母さんが子供達と過ごす時間のほうが圧倒的に長い為です。

よって、子供が直面する「現実」を肌身で感じるという意味で、現実を受け入れるしかない、と言う思いが強い場合が多いです。

一方で、男親の方、つまりお父さんになりますが、「冷静に対応する」という言葉を言いながら、単純に、決断を先送りしたり、現実を逃避したりする様子がみられます。

おそらく、会社に行ったりする事で、子供と一緒にいない時間を過ごし、子供の懸念材料や、自分の状況に目をつむる事が、ある程度は可能である点が大きいでしょう。

そのような場合には、お父さんだけで子供達と過ごす日を定期的に設けてみると、日ごろ、「ずっと」子供達と一緒にいるわけではないお父さんも、お母さんが何を訴えているのかが、非常に分かりやすいと思います。

例えば、「コミュニケーションを取れない」「宿題を一人でこなせない」と言う事を、子供に四六時中されると、いくら親でも腹が立つでしょうし、精神が不安定になるはずです。

発達障害やその周辺の子供達と関わるその大変さは、口で説明する事は非常に難しいと思います。けれども経験すれば、おそらく「一瞬で」「沢山」その意味が分かるはずです。

### 女親の弱さ

確かに、男親の方よりは、現実を見ている場合が多いお母さんですが、重大な思い込みがある点が気になるところです。

それは「子供をかばう＝愛情」という姿勢です。

私が伺うご家庭では、子供達への「誉めどころ、叱りどころ」がおかしい場合が大半です。特に子供への悪影響が大なのが「叱りどころ」のおかしさである事が普通です。

だからこそ、私が指導するお子さんは、学習面の問題だけでなく、人間関係においても、やってはいけない言動を繰り返し、トラブルにあう子供が多いのだと、私は思います。

その大きい要因として考えられるのは、親が悪い事をした子供を常に「かばう」姿勢により、子供達が悪い事を悪い事だと認識していない、と言う点があると思います。

さらに言えば、子供達は「悪い事」だとは思っていますが、「自分はやっていい事」であるとも思っている様子が伺えます。

なぜなら、それを許す人がいるためです。それが、一番近くにおいて、子供達の善悪の指針である母親なのですから、子供達にこれらの行動の改善が見られることはまずありません。

そのようなケースが見られたらならば、無論私は指導します。そして、悪い事は「絶対に」許す事はありません。普通に考えて、我儘な振る舞いは、許される事でしょうか？

そして、それを家の内外で使い分けが出来るほど、子供達の能力は高いものでしょうか？

その能力に疑いがあるからこそ、トラブルに合うという現実を目を向ける必要があると思います。

親御さんの前でやる、子供達の問題発言や言動は、その数十倍、数百倍の規模で、外でもやっていると考えて間違いありません。

あるいは、親御さんが疑問や不快に思う事柄の、数十倍、数百倍の規模で、周囲の他人は不快に思っている可能性が高いです。

よって、「問題行動はやめさせる」という強い態度が必要だと思います。なぜなら、それこそが、子供達が社会でやっていく上で必要な条件だからです。

そして、それらの対応には、家以外の場所にいる事が多く、比較的「普通」を見る機会が多いお父さんが活躍する事が多いです。なぜなら、子供達の「何が社会で通用しないか」を見つけやすい為だと思います。

また子供達は、親の「言葉」よりは「行動」に目を向けている事が多いです。

「人を非難してはいけない」

その言葉のすぐ後に、ご夫婦で言い争いをする様子を見せても、何の説得力もありません。

「お父さん、お母さんだって…」と言われない生き方こそ、本当の教育だと思います。

#### **他の家族は何をしているか**

また、子供達が発達診断を受け、何かしらの指摘があったとき、家族は、よき理解者を求めるのが普通だと思います。

「何かして欲しいわけではない」つまり、最低限の共通認識は欲しいと言う場合です。

けれども、この際、結構あてにならないのが、双方のご両親や親戚です。「人生経験」をたてに取り、全く筋違いの方向で、「子供の為に」道を築こうとする様子もあるでしょう。

つまり、豊富な経験と時間を生かして、「異常な量の問題や学習」を子供に課す事で、子供を「普通に」しようとする試みです。

当然のことながら、この方法は失敗します。

「普通」の量やレベルがこなせない彼らが、「普通以上」の量や質をこなせるはずがないためです。

「自分が死んだら、発達診断を受けてもいい」

このように言う方もいました。

何のための発達診断なのか？そして、子供達が直面している現実をさらに、悪くしている言動が、ご家族である事はあまり珍しい事ではありません。逆に親以外の大人が、必要以上に、子供を憐れみ、せつかくの「躰」を邪魔しているケースもあるかもしれません。

もしも、家族に発達に問題を抱える子供がいたら、子供達が向き合っている現実と同じものを見てあげてください。そして、人生経験を生かし、また時間を生かしてその子供さんとできる「子供達が理解できる事」を順序だてて考えてあげてください。

そのように、目線を合わせ、子供達に合ったレベルと量をこなす事で、子供達自身が、学ぶ喜びや、人と関わる楽しさを、必ず得ていくと思います。

### 兄弟で違う場合

発達に問題点が多いお子さんが家族内にいたとしても、他の兄妹には、その傾向の問題がない場合があります。

その際、親御さんの心の支えになるのが、この「発達に問題が無い」お子さんです。特に学習面において差が大きい場合は、「できる」お子さんのみを親御さんが期待し、注目するパターンも多いです。

逆に、大きな身体的な病気などでは、親御さんが病気の子供にかかりつきりになり、健康な身体を持つ子供が、家の中で孤立する、と言う事が見られることがあるそうです。

どちらにしても、「誰か一人だけ」の子供が親御さんの視線や愛情を受けるというのは間違っているでしょう。またそれは「親の立場から見て」そのようにはしていない、と思っ

ていても、子供達の不満はかなり深刻である場合が見受けられます。  
つまり、兄弟で「異常な」競争があり、助け合わなければならない場面でも、常に緊張状態が生まれていると言う事です。また相手の失敗を喜ぶケースもあるかもしれません。  
「うちの子達は、仲が悪いのです」

このようにおっしゃるご家庭では、常に子供達を比較する、親御さんの言動があります。

けれども、それを認めるご家庭は皆無です。そして、興味深い事に、親が子供を選別していると言う事について、わが子や、周囲は気がつかないとも考えているようです。

差別されている、あるいは見捨てられていると思っているからこそ、子供達は問題を無視しますし、兄弟に事件があっても「協力」しないのではないのでしょうか。

### 兄弟が同じ場合

また、残念ながら、他の兄妹が「同じ」発達の問題を抱える事は少なくありません。

特に遺伝的な要素が強いものほど、この傾向は顕著です。

ですから、「他の兄弟にも見られた」問題点について、親御さんは「再度」対応すると言う現実に向き合う事になります。

その際には、親御さん自身にも、この発達の問題が見られる場合があり、その場合には、学校やその他の支援団体も対応に苦慮する事になります。

なぜなら、話を通す事が非常に困難である上、周囲から見た「問題」を問題と捉える事が難しい状況である為です。

つまり「子供の問題行動＝親の問題行動」と言う具合に、親子の言動が一致する事もあります。そうすると、それを問題と受け止め、修正できる人が、家にいないということになります。

さらに、「外の支援を受ける事＝家のタブーに触れる」と言う事で、その状況が深刻であればあるほど、支援の手を拒む状況もありました。

家の中でのタブーで、子供が支援を受けられないことに、私は疑問があります。

そのような事よりも、子供達が、必要且つ適切な支援を受け、社会に近づく事の方が重要だと思うためです。このような現実がある方には、是非考えて頂きたい事柄であります。

### ③ 地域社会での連携では何が問題なのか？

#### 隠す姿勢

発達障害やその周辺のラインのお子さんは、「一見すると」その問題を、外から類推する事は、非常に難しいと思います。

だからこそ、「普通に」出来ない子供達に、周囲は反発し、また排除もすることがあるようです。

けれども、発達障害が診断されて、親御さんが取る行動として、以下のようなものがあると思います。

それは「隠す」姿勢です。

基本的に、医者や支援団体の中にも、「診断は周囲にいう必要はない」と言う方も多いです。確かにその面は否めませんが、「問題行動が顕著な場合に」隠すのは、結局のところ子供達のためにはならないと思います。

なぜなら、「隠す」姿勢のご家族に、周囲は声をかけにくいためです。

せめて、子供達がお世話になっている人には、診断の名前そのものではなくても、発達の問題点や迷惑をかけるかもしれない可能性を言うておく方が賢明であるように思います。

また、「隠す」と言う行為は、どうしても陰で噂になりやすい面があると思います。

ある程度オープンである方が、子供を支援したいと思う人が声をかけてくれる可能性も高まります。また、同じ問題を抱えた親御さんと、話をしたり協力したりする可能性も広がるように思います。

同じ問題を抱えた親御さんが集まる会などは、全国に沢山あります。

よって、そのような会にも一度参加して、対応方法の検討をしてみる事をお勧めいたします。

#### お友達がいらない？

地域の中に、お友達がいらない、あるいは少ないと言うお子さんの特徴として、「えり好みする」「友達に過度に期待する」と言う現象が見られます。

つまり、「自分にふさわしい友達」と言う形で、子供達自身が人を選別するのです。

反対に、友達が多いタイプのお子さんは、このような選別がありません。つまり、たまに合わない人がいるけれども、「みんなが友達」というのが、共通の感覚だと思います。

また親御さん自身が、「自分の辛さを分かってくれるのは、同じ境遇にいる人だけ」だと思いませんか？つまり力になりたい「周囲の人」を自分から遠ざけている可能性です。

ではなぜ、友達や自分の周囲に置く人を選別するのでしょうか？

それは、おそらく、そうする事で「安心」を得られるためだと思います。私の感覚からいえば、「百パーセント馬が合う友達」「自分の言葉を否定せず、全て受け入れる人」などいませんが、私が指導するお子さんは、このような友達を求める傾向にあります。

また、自分の方が「選んでいる」と言う事で、周囲に対し、優越感を得られるようです。けれどもそれは、結局「選ばれていない」子どもがよくやる行動です。つまり自分がされ

て嫌な事を、他人にもやるという状況がよくみられます。

加えて「主従関係」にも似た友達関係を続けるお子さんも多いです。

それは、「こんな自分でも友達でいてくれる」と言う具合に考えているためだと思います。このような思い込みには、必ず親御さんの子供への評価が関係しています。

つまり、選別をする子供さんの背後には、同じく「ウチの子は、良い子とだけ遊ぶ」と言う親御さんがついていきますし、反対に、主従関係を友達関係に持ち込む子供さんの後ろには、「わが子と一緒に遊んでもらえるだけで幸せ」と思っている親御さんがいます。

どちらにしても、子供の人間関係に、親が介入するケースがよくみられるのは確かです。

### 不安の原点

そして、「異常に」人間関係に神経を尖らせる親御さんも多いです。

それは、「わが子がいじめにあっていないか？」「仲間はずれになっていないか？」を心配するためですが（よって日記などをみたり、電話の内容を盗み聞いたりするようです）おそらくそれでは、同じことの繰り返しです。

たとえば、友達が多い子供の親御さんは、「子供に友達がいなくなる」と言う可能性について、微塵も心配などしていないと思います。つまり「誰かは」いるためです。

そして、加えて「人間関係にはトラブルはつき物」と考えて、トラブルがあったとしても大騒ぎしないのが普通です。なぜなら、わが子は解決方法を知っている為です。

そしてトラブルがあれば、「子供達に」解決をさせるでしょう。なぜなら、友達を作る事と同じくらい、トラブルを解決する事は、必要な経験だからです。そして、親が介入するのは、「子供に助けを求められたときだけ」であると思います。

そして、「助けを求める」と言う行動は、特に人間関係にトラブルを抱えやすい子供さんには、非常に重要な事柄です。また親御さんの不安定さは子供に「必ず」伝染します。

考えてみますと、「不安」に陥る親御さんは、なぜそうなるのでしょうか？

おそらく、子供達が友達や周囲の人に対して、どのような言動を取っているかを分かっているためです。つまり、「トラブルを招く言動」です。反対に、子供について心配していない親御さんは、そのように「気になる」言動を子供から受け取る事はないと思います。それこそが、「安心」につながり、子供達の自立につながっている印象です。

子供の友達についてあれこれ詮索し、また考える前に、我が子の「トラブルを招く言動」こそ、検討し、修正してもらいたいと思います。そしてそれはご家庭で出来ることです。

また親御さん自身が、「えり好み・過度の相手への期待、主従関係」の人間関係がないかを考えてみて頂ければと思います。案外、子供達は親の真似をしてののかもしれません。

### 発達障害は不幸か？

発達障害やその周辺の子供達を持つ親御さんの共通の悩み…それは、「この子は社会に出て、一人でやっていけるのか？」と言う不安です。

その不安があれば、通常は、「普通以上に」様々な基本的な生活も含めて、家庭内で指導していくと思います。けれども、「何を教えればよいか？」を考えて、子供達がそれを獲得

できる方法を真剣に模索しているパターンは少ない、もしくは「ない」印象です。

なぜなら、親御さんが「全て」手出しすると言う事で、毎日を送っている子供達が多いからです。

子供達が「何も出来ない」のは、親御さんが「何もさせてない」為です。

「お母さん（お父さん）、これやって」

と言う具合に、なんでもかんでも、お父さん、お母さんにやってもらっています。勿論、自分の身の回りの事、例えば道具などを準備したり、時間割をしたり、連絡帳を確認し、プリントを閉じたり…つまり全て親がやっています。これは男女の違いはありませんが、「召使のごとく」子供をサポートするのは、男の子を持つ親御さんである事が多いです。

当たり前のことながら、子供達はいつまでたってもできるようにはなりません。けれども親御さんの悩みは「ウチの子は〇〇ができない」というものです。

なぜ、親御さんは手を出し続けるのでしょうか？

それは、おそらく、学習も厳しく、友達も少ないわが子が「不憫」であるためです。

私の考えでは、「できること」もやらせてもらえず、「全く」何も出来ずに大人になることのほうが、よっぽど「不憫」だと思いますが、その感覚には、大きくズレがあります。

いつも思う事ですが、私にとって教育とは「一人でやっていくこと＝自立」を教える事だと思っています。その事について理解できていない親御さんも多い印象です。

また、おそらく、親御さん自身が手を出した方が、イライラしながらみているよりも、「ラク」です。また「子供にとってなくてはならない存在」と言う自分を確認できるメリットがあるようです。

一方で、私は、授業内で、プリントの整理に始まり、宿題のメモや、ノートの確認など、全て一人でやらせる事が普通です。

確かに時間も掛かりますし、私がやったほうが早いし確実である事も事実です。

けれども、子供達がやるその「第一歩」をきちんと認めてあげることのほうが、より重要だと思っています。

### 憐れみを捨てて

子供達を憐れむからこそ、「過剰な」手出しをする。

その手出しが「過剰か否か」を知る方法は簡単です。親である皆さんの言動は、子供達に「どうすればできるか」を示すものですか？つまり「方法を教えている」と言う事です。多くの場合、「ただやってあげる」と言うものだと思います。

それでは、子供達は「何もしなくてよい」と考えても不思議ではないはずです。

その事実をどうか受け止めて欲しいと思います。

そして、「親に憐れまれる」子供ほど、みじめなものはありません。

なぜなら、一番子供を信じてあげるべき人が、「わが子にはできない」と思って、最初から何も教えていないからです。

憐れみで子供は育ちません。憐れみは甘えを生み、甘えは依存を生みます。

この負の連鎖を断ち切る事が非常に重要だと思います。

そうすれば、親御さんのご近所への対応も変わってくるはずです。

「この子を助けてやってください。どうか許してあげてください」

というのではなく、

「この子を見守ってやってください。してはいけないことは注意してやって下さい」

となるはずです。そして、注意してくれた事には感謝が必要だと思います。

なぜなら、改善の余地を教えてくれたのですから。そして、社会のルールを守るその方法と重要性と一緒に学んでいけばよいと思います。

そうであれば、喜んで協力してくださる方もいるでしょう。

なぜなら、周囲の人の不満は、「できない」事よりも、社会で許されない行為について「できない事を放置する」「障害なのだから、許されて当然だ」という、その姿勢である場合が多いからです。

その証拠と言っては何ですが、私が指導する子供達は「完全に」言動が直った、と言う事はないです。けれども、「マシになった」と言う事はあります。

そして興味深い事に、「程度がマシになった」それだけでも、人間関係はスムーズに行く事が多いのです。

それは、その子供の変化を、周囲が認めてくれたからだと思います。

近くにいる人は、その変化の理由が、子供達の頑張りであることをよく分かっているためだと思います。

そして、周囲の注意点到留意する事が、子供達が社会に近づく第一歩になるかもしれません。周囲は親御さんが気づかない点を教えてくれている、そう受け止めるだけで、事態は違って見えるでしょう。

ご近所やお友達と上手く行かないと思う方は、是非、視点を変えてみてください。



これからすぐできる教育改革

### 第三章 これからの教育の将来を解く

#### ● 学校に望む事

##### ① 学校の先生の質の向上

#### 質が悪いというよりも…

大学に行った経験がある方はご理解いただけると思いますが、一般の大学において、教員になるためには、通常の授業に加えて、教員になるための授業を受ける必要があると思います。

その際、特徴的なのが、授業の「コマ数の多さ」です。

私の友達で、教員の勉強をしていた人は皆、大学から帰るのが遅いのが普通でした。その中で、早く帰ることが出来る私は、せっせと家庭教師を「実地で」頑張って勉強し指導していました。

教員になるまでに、四年生のときに実習があると思いますが、逆に言えばそれまではどのように「実際に」子供と接する勉強はない、あるいは、少ないように思います。

よって、実質的な意味で、

- ・子供達は何を困っているのか？
- ・親御さんとどのように話をすればよいのか？
- ・発達に問題がある子供とはどのようなもので、どんなサポートが必要か？

これらの事柄を、「経験として」学び、考える機会が少ないと言う事になると思います。そうなるとうしても、実際に教師として教えるようになってから「いきなり」現実と直面すると言う状況が生まれやすいように思います。また理想だけで現場は運営できません。

#### 研修制度の充実

多くの専門的な職業の場合、数年あるいは数十年単位で、指導者に付き、その分野を学んでいくのが普通です。

けれども、この「人を育てる」と言う概念は、教育産業では薄い印象です。「実地に時間をかけ、現場でベテランの先生に何年か付く」と言う点において特に欠けています。

ですから、他の塾講師や家庭教師でも「指導の経験不要」と但し書きがあるのが普通ですし、「教育＝大学を出たら誰でもできる事」であるのが、今の日本の現状である印象です。

私自身も、今でこそ、「ああ、またこのケースか」と言う具合に、様々な出来事や訴えについて驚かなくなりましたが、当初は本当に戸惑いました。

なぜなら、学校の勉強が何学年も遅れている生徒を見たからです。

九九も出来なくて普通、足し算・引き算もできない。文章を読ませると、何を読んでいるのか分からない…。

私が当初思っていたのは、例えば計算は分かっているけれど、「文章題が分からない」と

いうラインの生徒さんを指導する事でした。

つまり「ちょっと難しい事」を一緒に勉強する、というのが私のイメージでした。

けれどもこれは大きく違う、と言う事が実際に何件か指導して、実感として納得し、またそれが「珍しい事ではない」と思うようになり、発達障害を猛烈に勉強しました。

よって、学校や塾のテキストを見て思うのは、「難しすぎる」と言う事です。あるいは、子供達の「分からない」という現状に即して作られたものではないと言う印象があります。

確かに色が使っており、絵も多いのですが、それでも子供達にとっては、

「分からない…難しい！」

となるようです。また、勉強から遠ざかる様子がよく見受けられます。

そして、問題を解くのに時間がかかる子供が多いのに、問題の量が調節されていない面も気になることです。

よって、様々な生徒がいるのが前提で、「超基礎的な事柄」が分からない子供達への対応方法や、その発達の問題について学べる期間を充実させる必要があると思います。

#### どのラインの子供に授業の質を合わせるか？

「授業をどのラインの子供に合わせるのか？」という問題はよくあるものです。

けれども、「最も理解度が低い」子供が分かる授業は、「最高レベル」のものであり、それは、「理解度が高い」お子さんにとっても、「よく分かる」授業であると思います。

理解度が高い子供さんは、結局のところ、学校の授業がなくても理解は出来ます。けれども、授業がなければ「絶対に」理解できない子供達こそ、是非メインとして指導していく姿勢が望まれます。学校ではとにかく「分かる」授業が望まれると言うのが私の希望です。また、今の時代、学校以外の塾や家庭教師を雇えるご家庭ばかりではないでしょう。

よって、公立の教育機関で受ける授業の質の向上が急務である気がします。

#### 引退した先生

小学校の時、私の担任だった先生は、教師を引退した後も、不登校のお子さんやそのほか様々な問題を抱えた子供達を相手にして指導されているようです。

そのような「経験・知識」を備えた、既に引退した先生をもっと効果的に、そして組織的に活用していく方法があると思います。

一方で、全ての先生が引退後も働きたいとは思っていないでしょう。

そして、先生が働きたいと思っても、子供達の評判が悪い場合もあるでしょう。

よって、先生本人の希望に加え、伸び悩む生徒などの推薦が得られる場合などに、改めて、何かしらのトラブルを抱えた子供をサポートするシステムがあればと思います。

またクラスの運営においても、引退した先生をおく事で、「いつでも相談できる」あるいは、状況次第では、常時「二人担任制」と言う具合に、充実させてもよいと思います。

しかもそれは、ボランティアで…と言うのが望ましい感じです。なぜなら、ボランティアである方が、「自分の立場と関係無く」「率直に」意見が言える気がするからです。

無論、必要最低限のお金、例えば交通費や実費などは払う必要があると思います。

## 授業前・授業後クラス

せっかくサポートシステムがあっても、わざわざ、みんなが教室の中で、自分ひとりだけ別の場所で授業を受けるというのは、やはり子供のプライドを傷つける事になると思います。

よって、授業前の朝の時間や、授業後のクラスを設けるあるいは土曜日などに、補習をすると言う事が望ましいケースもあるでしょう。それは、学校内あるいは、学校のすぐ近くの公共機関で、「日常的に」展開する事がベストだと思います。

実は、私は不登校の子供のために、「公民館で」指導しようと思った事があります。そして、それを公民館に申し出たところ、先方の返事は「だめ」でした。

向こうの言い分としては、要するに、学校以外の教育産業にいる私が「公の場で」指導すると、公民館の活動が阻害されると言うものみたいです。どうやら、私の職業がネックになったようです。

けれども、適切な指導ができ、なおかつ経験もある人となれば、私のような立場の人間が当然考えられると思います。また、会場代がかからなければ、不登校の子供達が「毎日」「安く」集まる場を提供する事ができます。

同じように、授業についていけない子供達には、朝であれば、私は、学校を巡回してもよいと思っています。また、私の住む町では、希望があれば補助員が付きませんが、何学年も学習が遅れている子供に、通常学級で補助をつけてもあまり効果は高くないと思います。

授業前・授業後クラスは、子供達が「一対一」の指導を受ける機会を得られるメリットがあります。また、学習について相談できる人がいる、と言う事が周知されるでしょう。

そして、子供達自身の学力が「何学年も」遅れ、親子ともに苦悩し、子供達のやる気が削がれる前に、それを食い止める事ができるはずです。

是非、これらのシステムも考えて頂きたいと思います。

## 一緒に学ぶ場

もしも、子供達のサポートを学校ですることができたなら、それと同時に、親御さんのサポートも可能であると思います。

基本的に私が伺うご家庭では、子供さん以上に、親御さんの方がダメージを受けている場合が少なくない為です。つまり悩みが多い印象です。

また、親御さんが、わが子にせっかく教えても、見当違いの方法や、適切でないテキストを利用しているケースが目立ちます。よって、教える時間が「子供との喧嘩の時間」「より深い絶望につながる時間」になっていることも少なくありません。

私のような立場の人間であれば、教材の選び方から、指導の仕方まで、教える事は可能だと思います。

そのようなサポートを、一定のシステムとして構築できたらと思います。

私一人だけでは、無理ですが、このようなシステムを作る事によって、他の参加者を募る事ができ、教育を柔軟な形でサポートできれば理想的だなと私はと思っています。

## 就学前勉強会

一般の公立小学校に通う前、多くの人が、健康診断やIQチェックを受けたと思います。つまり「就学前に」学校に赴く機会があるということです。

この絶好の機会を利用して、いわゆる、「軽度発達障害」の勉強会があれば、親御さんに、その種の発達の問題を周知しやすいように思います。また、同時に相談機関を紹介する事も重要だと思います。また、学校内に、発達について相談できる先生がいる事も、情報として、親御さんに渡しておくとい良いでしょう。

これは、「任意」ではなく、基本的に「強制」として、参加して頂くべきです。

加えて、そのような勉強会をする事で、親御さん自身が、わが子の言動や成績について、長く思い悩んだり、各機関を回ったり、相談する場所を探したりする手間を省く事が出来ると思います。

また、正しい知識を「最初に」入れる事で、変に絶望したり、子供に辛く当たったりと言う事がなくなるはずで

## 高い教材

高い学習教材は、私が伺うご家庭では、割と頻繁にお目にかかります。

なかには、教材が、百万単位のものがありました。

そのような教材に手を出す理由は、子供の学習に対する、親御さんの悩みが深い為です。

高い教材を使わなくても、市販されているもので十分な場合も多いです。

その意味でも、学校や各機関の説明会では、ただ「発達診断」を促す為ではなく、学習やコミュニケーション全般にわたって、正しい情報を発信し、尚且つ親御さん同士が、勉強できる場があればと思います。

そうする事で、親御さんの孤立を防ぐ事ができるはずで

高い教材に希望を持ち、通信販売の人間にしか、わが子の学習の悩みを話せない立場にいる、学習が著しく困難な子供を抱える親御さんの現状を、ご理解頂ければ幸いです。

## ②教育システムの変革

### 大きな問題

今の学校の大きな特徴として、発達に問題がある子供について、「把握はしているけれども介入はしていない」と言う事があると思います。

「把握はしている」というのは、人間関係のトラブルや学力不審など、分かりやすいのが発達障害の特徴である為です。確かに、発達障害は「外から見て」は分かりにくい事柄ではありますが、毎日観察していると「すぐに」分かる種類のものである事が多いです。よって、どんな先生でも、実際に発達障害のレベルか否かは別にして、自分のクラスにいる、何らかの問題を抱えた生徒について、「すぐに」名前を挙げる事が出来ると思います。

私が申し上げる「介入していない」と言うのは、特別に何かサポートをしたり、親御さんと話をしたり、あるいは、発達診断を積極的に受けるように勧めるケースは非常に少ないと言う事です。その時、教師は、不作為でも何の罪にも問われません。親もしかりです。

多少強行かもしれませんが、不作為が何回かあった先生には、勉強会への参加を義務付けることが望ましいと思います。また、不作為の親には、医師や学校長の判断で、診断や療育を進める権限が必要です。方策を変えなければ、「支援が必要な子供達が放置されている」という、現状は、改善しないと言うのが私の印象です。

### 一ヶ月・夏休み前・一年

基本的に、私が指導する子供達は、「物心付く頃には」何らかのトラブルや学力不審が表に出てくる事が多いです。つまり「いきなり」分からなくなった訳ではないのです。

よって、始業式から一ヶ月くらいで、学校の先生による検討会がある事が望まれます。その上で、家庭訪問をすれば、より意味があるものとなるでしょう。担任の先生一人が、何らかの問題がある子供達を抱えるのではなく、学校全体の支援が必要だと思います。

会議の中では、「障害のレベルか否か？」と言う事が分かる先生や医療機関の人間が必ずいることが望ましいですし、それがベストです。

その中で、それが障害の疑いが強い、と判断されれば、早急に「必ず」診断テストを受ける事をまずは徹底して欲しいと思います。現状では、「状況を見る」という名目で、学校内に、変な躊躇が存在する為です。また、親の申し出を待っても無駄です。

そして、支援が必要な子供を放置して、メリットは全くありません。なぜなら、学年が進むにつれて、問題が減る事はなく、むしろ問題が山積するのが普通だからです。

その会議で、要素が少なかった子供は、夏休み前に「必ず」検討されるのが望ましいと思います。そうする事で、じっくり子供を観察できる為です。また、観察の目は「複数」合ったほうが、親御さんとの話し合いのときによいと思います。

また、一年つまり学年が変わるときには、発達について問題を抱える子供達の重要伝達事項を「学校全員で」共有する必要があると思います。

なぜなら、その共有こそが、「第二の」問題を抱えた生徒の対応に役立ちます。また、担任が変わっても、サポートがスムーズに行く可能性が高い為です。

## 病気だったら

「子供がガン」

と聞いて、病院に行かない親御さんはいないでしょう。加えて、その診断を受けた結果、「まだ大丈夫。親がサポートできる」と考える方もいないと思います。

これこそが、発達の問題との大きな違いであると思います。

考えてみますと、発達障害は、脳の機能の問題であるとはっきり分かっています。つまり、専門家の下に、きちんと療育していく必要があるものです。

また、きちんとした知識と療育があれば、問題に発展せずに済む可能性があります。

親である自分達だけで大丈夫…

この思い込みを捨てる事が重要だと思います。知識と実際に療育できるかは、別物です。

また、学校の先生に迷いがあっては、親御さんはその「少し」の可能性にすぎるのが普通です。つまり、「この子は普通なので、サポートは不要」だと言い張る事です。

話は変わりますが、ガンと診断されて、手術を受けるとき、お医者さんからは「これでもか!」と言うほど、その手術の説明と、様々な可能性について説明されるようです。

つまり、詳細な「説明」と揺るがぬ「態度」は、大きく親御さんに影響するでしょう。「いわゆるガンだったら、このまま放置しますか?」

私がいつも親御さんに聞きたい事柄であります。そして子供達の年齢により、出来る療育が変わっていく事が普通です。また子供が小さい頃あれば、子供達自身も、親の言う事に疑問を持たず、療育機関に通う事も簡単ですし、様々な手を打つ事ができるでしょう。

## 学校医

また、春には健康診断があり、また近所の病院の先生も学校を出入りすると思います。

その制度を利用して、小児神経科医を学校医にするシステムがあればよいのでは、と私は考えています。

地域に住む専門家が、学校を手分けして巡回し、子供の発達を見守るシステムです。

これによって、身近に発達について相談できる先生をおく事が可能です。発達診断では、学校や親御さんからの聞き取りも重要な要素である場合があります。

よって、日ごろからこの種の先生と行き来があれば、診断もスムーズに行くはずですし、先生も診断を下しやすいでしょう。

また、そのような小児神経科医の先生は、生徒全員に目を通す、というよりは、日ごろの様子やテストの具合が書かれたカードを読み込み、それに「問題の可能性アリ」と判断された人が、相談できてもよいと思います。そして、学校の先生が気になる子供を相談できてもよいでしょう。そうすれば、学校の先生が、孤立せずに済みます。

また、私の立場でさえ、本当に多種多彩な相談を受ける事が多いです。

故に、そのような相談を、「専門家」に聞く事で、早期発見あるいは、安心につながると思います。そうする事で、「疑惑の目」「家族のお荷物」という視線を、親御さん自身が、わが子に向け続けずに済むはずです。

### ③「超独断」進学校の利用法

#### お医者さんばかり？

突然ですが、私は地方の進学校を出ました。（ご想像のとおり、私はその中でおちこぼれですが）よって、私自身の友達や、あるいは学校全体として、「お医者さん」と呼ばれる人が、同じ学校の出身者に、非常に多いのが特徴だと思います。

それを何とか利用できないか？と考えてみて、勝手に思いついた事があります。

それは、「学生のと時から」発達に問題がある子供達のサポートに関わるという事柄です。

今の時点で、発達診断を受けようと思ったとき、あるいは、発達診断を既に受けた方は分かると思うのですが、非常に、待たされる事があるでしょう。

なぜなら、発達について詳しい知識を持った専門医が圧倒的に少ない為です。

よって、せっかく思い立っても、診断が実際に下るまでに、かなりの時間を要します。

この中で考えていかなければならないのは、小児神経科医に進みたいと思う人を育てる事です。また、他の分野のお医者さんでも、発達についてある程度知識がある事が望まれます。

#### お医者さんの専門性

ちなみに、私の知り合いの小児科医に会った時、私の近況として、  
「LDを含めて基礎学力をつけたい子供とかを指導しているよ」  
と伝えると

「LDって何？」

と言う答えが返ってきました。その後その人は、LDについて勉強してくれたよいお医者さんですが、これが現状だと思います。

つまり、今の日本のお医者さんは、細分化されており、自分の専門以外の事柄はあまり詳しくないと言えます。

それは専門性としてはよいと思うのです。それこそが、今の日本の先端の医療を支えていると思います。

けれども、今現在、子供の発達に詳しい専門家を増やすと言う事に当たって、急に小児神経科医が増えると言う事は望めません。よって、既存のお医者さんの中で、発達に問題がある子供を見る可能性が高い場合は、発達を勉強し、発達障害の疑いがあれば、お医者さんから受診を促してもらえるとベストです。子供達が専門に早く近づく門戸になります。

#### ボランティア

また、私自身が所属していた学校では、あるボランティアクラブがありました。

それは、様々な障害を抱えた人たちと交流を持つというものだったようです。（ちなみに、私はバスケット部のマネージャーでした）

よって、このような活動の中に、「学習サポート」を入れてはどうか？というのが、私の



考えです。

この学習サポートには以下の子供達が中心に通う事ができます。

- ・発達に問題を抱えた子供
- ・基礎学力を付けたい子供
- ・経済的に厳しい状況にある子供

学習の主な目的は、「発達障害」の子供のサポートですが、その周辺の子供達も見ることで、「障害」の意味がより分かりやすくなると思います。

そして、基礎学力を付けたい子供達の中には、発達に問題があるレベルも含まれる事が、十分に予想されます。よって、それを早めに発見し、療育する事が可能となるでしょう。

経済的に厳しい状況にある子供達にも、学習の機会があればと思います。そして、いわゆる「進学校」で「お医者さん」を目指す子供は、高いレベルの指導もできる事が多いため、有意義な時間を子供達と過ごせるはずです。

また、場所については、その進学校で教える事も出来ると思いますが、子供達が通ってくる事が難しい事が予想される為、各地域の拠点で指導できて良いと思います。

それには、今度は、教える子供達が大変になる、との懸念があるかもしれません。けれども、私の考えでは、それは問題ないと思います。

なぜなら、「進学校」と言う場所は、県内全域から生徒が通ってくる事が多いからです。ちなみに私の学校も、通学が一時間というのもそんなに珍しくありませんでした。

よって、場所や人員も含め、無理なくボランティア活動が出来ると思います。

### ボランティアの意義

私の中では、お医者さんや他の医療分野で活躍したいと考えている子供達に、このボランティアをやってもらいたいというのがあります。加えて、その他の子供達でも、「是非」挑戦してもらいたいと思います。

なぜなら、彼らは「分からないということが分からない」と言う事がよくあるためです。

特に、中学校高校ラインでは、人生の挫折や「自分が出来ない」と言う感覚を持った事がないタイプも多く、人の「できない」「分からない」に、案外、鈍感であると言うのが、私の印象です。よって、大学に入って家庭教師をしても成果が出ない事もよくあります。

私が「優秀な」友達に質問しても「ここは分かるよね」と言われ愕然とした事があります。(ちなみに、私は子供達の「分からない」が「実感として」理解できる学力です)

よって、そのような子供達がいる、と言う事を知る事も重要だと思いますし、勿論、発達障害に「実際に」近づく、よい経験であると思います。

その中で、この問題に興味を持つ生徒が現れるかもしれません。また、実際に指導方法が研究される事もあり得るかもしれません。

指導する子供達には、解決方法が本には書いておらず、また逆に、解決方法が無限にある事柄に挑戦していく、その方法と気持ちを養ってもらえればと思います。

## ●家庭に臨む事

### ①親御さんの認識をあげる

#### 本は指針

例えば、せっかく診断を受けても、私以上に知識があり、またきちんと勉強している親御さんはいなかったように思います。「わが子のことなのに…」です。

最近、様々な発達について、ネットである程度調べられますが、体系的にしかも、専門家が進める本と言うものがあると思います。

欧米では「悩む暇がないほど」子供たちを理解するために必要な本のリストを渡され、それを読むことに時間を費やすようです。

逆に言えば、その専門的な勉強がなければ、子供たちの現状を掴む事が、非常に難しい事を示していると思います。

よって、診断されたならば、読むべき本の一覧表などがあれば分かりやすいはずで。そして専門書と言うのは高額である場合が多いので、病院や学校、図書館などで、優先的に、どこに住んでいても、貸し出しできるシステムも必要であると思います。

#### 実際にわが子を検証する

私が担当する親御さんは、以下の事柄を認識していないことが多いです。

- ・子供たちの記憶レベルが、高くはない事は分かっているが、小学校高学年で漢字以前に、平仮名やカタカナを必死に思い出すというレベルだと認識していない。
- ・子供たちの算数のレベルが、高くはない事は分かっているが、九九や、グラフの読み方、簡単な足し算引き算も出来ないことを認識していない。
- ・子供たちの社会スキルが、高くはない事は分かっているが、周囲から「トラブルは自業自得」「関わらない方がよい」と思われるほど、ひどいとは思っていない。

おそらく、子供たちの現状を認めたくないためだと思います。よって、基本的に「他にも出来ない子供がいる」と言うことをよく口にされることが多いです。

けれども、その「質」が違うのが、発達障害の大きい特徴です。

発達障害の子供たちの特徴は、いわゆる「基礎」などの、一般的な子供たちが「簡単に」身につけることが、非常に難しいと言うのが実情だと思います。

それこそが、「障害」と言われるゆえんではないでしょうか？

#### 親に受け入れられる事

子供たちが無理のない程度に学べる環境、そして「百点」を取ることも、必死に勉強するその様子を受け入れることができたなら、子供たちの様子は変わってくると言うのが、

私が経験上申し上げられることです。

けれども、親御さん自身が、子供たちがおかれた状況の認識が甘い場合や、子供の現実について逃避する場合は、学校の授業が相当危ういの、「中学受験」を望む事もあります。

また、「子供たちの能力をはるかに超えたレベル」の教材を使う場面にもよく立ち会いました。

- ・ 分厚い → 薄い方がやる気が出る
- ・ 字が小さい → 大きい字のほうが覚えやすい
- ・ 図解がない（少ない） → 絵のほうがイメージしやすい
- ・ 音声がない → 音声も付いていた方が、文を理解しやすい

最近、パソコンで勉強できる商品があり、図と声が同時に出るものも売られています。けれども、これは「小学生まで」であり、中高生になると途端に、本と同じく、動かない、音が出ない（つまり文章の読み上げがない）教材になります。

発達に問題を抱えた子供だけでなく、図や声が出ると他の子供でも理解しやすいですし、家で勉強する子供たちにも、大きく役立つと思います。

#### **手を出しやすい教材を！**

ただ、特に、発達に問題を抱えた子供達用に開発された教材は、「非常に」値段が高く、とても「選びやすく、使いやすい」物とはいえないと思います。

また、「こんなことが分からない」という本は沢山出ていますが、では、「どのように教えていくか？」と言う親御さんや一般向けの本や問題集は、非常に少ない、あるいは「ない」というのが現状です。

その事も、子供達が「全く学習レベルにあっていない」教材を使い、勉強から離れていく原因だと思います。

よって、間違いのパターンが示してあり、極力文字が少ない、あるいは、あったとしても読み上げ機能があるような教材が望まれます。

とにかく、教材については、子供自身が、試しに使ってみる事が一番良いと思います。

特にパソコンのソフトなどは、お試しが可能です。ホームページ上で、子供達自身の意見を聞いてあげてください。

## ②「必ず」診断を受ける

### 診断拒否の理由

よく言われることですが、子供たちの「発達障害」が非常に明確な場合でも、親御さんがその診断を病院で受けることを拒否するケースは非常に多いです。

その中で、診断を受けずに、「普通」として育てることが「子供のため」と言う論理の展開を、口にする方が多いのですが、同時にこんな事を言う方もいます。

「自分が死んだら、診断を受けても良い」

「子供と一緒に死のうと思った」

「もう調べているから、診断は必要ない」

このような形で、現実を逃避する方も何人か会ってきました。

診断を受けないと言う選択肢により、親御さんの中で「幸せ」になるはずだったようなのですが、結局のところ「現実」とのギャップの中で、心身ともに疲弊するのが普通です。

おそらく、家の中にこれまで以上に「タブー」があります。また、支援者も離れていき、常に夫婦間、親子間でトラブルが続出するためです。

### 親の義務

学校も、そのような親御さんへの対応に苦慮しているようです。

けれども、発達への診断が「義務」ではないため、結局のところ、望ましい理解者やサポートに恵まれない子供達が大勢います。

その中で、親御さんの「親としての役割は果たしている」と思える一つの要素として「家庭教師」という存在があるようです。

「どうせだめ」ならば、「誰でも良い」と言う感じでしょうか。

子供を虐待する親は逮捕されます。

けれども、子供達に必要な教育やサポートを受けさせない親は、逮捕されませんし、そのことで困るのは、親御さんではなく、子供達自身です。

親がいなくなった後、子供達はどのように生きていくのでしょうか？

他の兄妹や親戚が支える事になるのでしょうか？

「支える」とは聞こえがよいかもしれませんが、つまり「犠牲」になるのでしょうか？

### 発達支援センターの存在

センターで、発達相談が出来るとしても、そこに行かない人は、沢山いると思います。そんな人に対しては、私は「出向く」しかないと思います。

つまり、専門家が、学校を巡回するのです。

そして、それは「外部の人」である必要があると思います。

なぜなら、変に学校内で、もたれあったり、事実を隠す必要がないためです。発達の問題について、私が数回指導して分かるのですから、学校の先生が、子供達の発達子供達の

の問題に気がつかないはずがないのです。

そして、学校の先生も、発達に問題を抱えた子供達への対応に苦慮し、自分自身が疲弊している現状を考えると、専門の知識を持ったサポートする人が、定期的に、学校に直接入ることが重要だと思っています。

ただ、この発達支援センターに、子供達の発達に詳しい小児精神科医が常駐していない事もあり、この発達支援センターの機能そのものを見直していかなければならないと言う面もあります。

### ③希望を持てるサポートシステム

#### お先真っ暗にしない

多くの親御さんが診断を受けない・ためらう理由…

それは、結局のところ「何も変わらない」と思っているためだと思います。

むしろ「発達障害」と言う診断がつくだけで、子供達の人生が、「お先真っ暗」な状態になるというのが、診断を受けない親御さんの考えの根本だというのが、私の印象です。

#### サポート体制の現実

考えてみますと、親御さんの不安が、まんざら嘘ではないというのもまた現実としてあります。実際に、診断を受けても「何も」サポートがない子供も見ました。

その理由は、「専門家」の指導が受けられる場所が非常に少ないと言うことです。

支援学級に限って言えば、知的障害や重度の障害を抱えた子供達が主流で、いわゆる「軽度発達障害」を抱えた子供達の場所や先生が、不足していると言う点が上げられます。

また、その「支援学級」も、それ自体がない学校もあり、そうすると、子供達は「毎日」学級に通い、「長い目で」「専門的に」多くの先生に見守られる機会がないようです。

そして、特に学習において「救済措置」もない、あるいは少ない印象です。欧米ですと、書くことが難しいお子さんに対し、パソコンなどで答案を作る事が認められています。日本でも、耳が聞こえないお子さんには、リスニングではなく、代わりの文章題があります。

そのように「代替措置」が可能ですと、親御さんもメリットを感じやすいと思います。

#### 見えるサポート

親御さん自身が、ノイローゼになる理由は、要するに子供の将来が見えずに、子供の行く末が「分からない」事だと思います。分からないからこそ、自分で類推し、その類推が「最悪な方向に」のみ展開するようになる事も珍しくありません。その暗雲が家族全体を覆う事もあるでしょう。

よって、例えば支援学級についても、「診断を受ける前から」気軽に見学でき、学校に入学する前から、可能な限り、支援学級に通うシステムが「必ず」あれば、親御さんはもっと「現実として」子供をどう対応していくかを考える事が出来るはずです。

そして、補助金などの制度があることも、きちんと周知される必要があると思います。専門家の下に通わせる場合、多額のお金がいる事もあるためです。

思うに、子供達に、発達に疑いがある親御さんの頭は、以下の事で一杯だからです。

「自分の子供は、これから先どうなるのだろう？」

人間は、たとえ、自分が望んでいない事実を聞く事よりも、事実がつかめず「分からない」事の方が、精神に負担をかけ、病んでしまうと聞いた事があります。

よって、「親御さんに見えるサポート＝透明性がある」と言う事で、不安を少しでも減らす事が重要だと思います。

また、「誰に向けても」情報の透明性があることで、外部からの活発な意見も聞けるかもしれません。活発な意見がある、と言う事は、改善され、「よりよいシステムが生まれる」可能性を持つと言う意味で、親御さんの希望につながる事が予想されます。

#### 支援が先？

残念ながら、どうしてもわが子の発達の問題を受け入れられない親御さんはいます。

そして、それは珍しいことではありません。

けれども、それは決して、望ましい事ではないと思います。

そのようなケースの場合、とにかく「支援」を優先させると言う事も出来ると思います。

たとえば、自分の子供が「発達障害の子供」と言うことについては、手を上げる親御さんは少ない、あるいは、ほとんどいないと思いますが、

- ・文字を覚えられない
- ・文章を読めない
- ・計算が出来ない

と言う事柄については、反応する親御さんもいると思います。

つまり、「大元の原因（つまり発達障害）は、その時点で認められないが、末端の事象（学習の停滞）」に関しては、認め、それを問題として受け止める事ができる事が多いように思います。

実際、ある県では、大学の教授とその生徒が、そのように、支援が必要な子供達を集めて、土曜日等にサポートを開いているようです。

つまり、子供が実際に診断を受け、サポートに自らやってくるのを待っていては遅いと言う事です。あるいは、親御さんが障害を認め、現実として手を打つ事を待っていては、どんどん子供達の勉強の場が奪われ、また二次障害の危険性も大きくなるのが普通です。

二次障害とは、勉強ができずに、親や周囲に認められないことで、自尊心が養われないことです。あるいは、友達と上手く行かない事で、不登校や引きこもりが発生したりする事です。

とにかく、子供達にとって最大の利益となるシステムが重要だと思います。そしてそれは、複数の道があるのが理想的だと思います。

そしてその道を、親御さん自身がつぶす事がないように祈るばかりです。

## ●社会に望む事

### ① 発達障害の存在を知る

#### 「分からない」存在？

今の時代、発達に問題を抱える子供達やその周辺の子供達について、新聞やマスメディアで盛んに議論される事も珍しくなくなっていると思います。

けれども、それを見た方の印象としては、

「そんなに大変な事があるんだな」

というような、知識としてはあるけれど、「自分とは関係ないこと」として捉える一面です。

やはり、「実際に」その子供達の言動を見たり聞いたりしたわけではない、というのが「他人事になる」大きい理由だと思います。

けれども、そのように問題を抱えた子供達は、通常クラスに数名程度在籍している可能性を指摘されています。また、ご近所や会社にもこの傾向を抱える方はいるはずです。

また、私が指導する基本が全く分からないお子さんも、「全て」通常学級に在籍しているお子さんです。

よって、まずは、そのような子供達は「身近にいる」と言う事を念頭において頂きたいと思います。

#### 親でさえ分かっていない？

よくある事なのですが、親御さん自身が、自分の子供以外の、クラスにいる何らかの障害と既に診断を受けた子供に対して、噂し、あるいは、蔑視する様子もよく見られます。しかも、私から見て、親御さんのわが子は、発達障害の疑いが濃厚なのに…です。

この言動は理解に苦しみますし、自分の仕事の意義を疑う事もしばしばあります。

また、「わが子よりも酷い境遇・能力に見える子」には、自然と目が行き、「あの子よりはマシ」と言うような表現で終わる事が多いです。

また蔑視とまでは行かないまでも、「クラスを乱す」「奇異な」存在として、その診断を受けた方を名指しする事も珍しくありません。

なぜなら、自分の子供は「あんなに酷くはない」と思っているためだと思います。けれども私の目から見て、両者は何の違いもありません。

むしろ、現実的に子供を考え、発達診断を受けている親御さんの方が、数段話をしやすいです。また、専門的な情報も渡しやすく、変な食い違いも起こりにくいのが通常です。

けれどもそのような蔑視の一方で、わが子について、他の子供達の、特に学力などの共通点には、敏感に反応します。

私が持つご家庭では、「子供が正常な発達を遂げているか？」と言う点よりも、「点数を満たしているか？」に視線が集中する事が多いです。

逆に言えば、点数さえ取れていれば、言動のおかしさや、先生からの再三の忠告に目をつむることが出来るようです。



## 知る努力

この文を読んだ方で、子供の発達診断に迷っておられる方もいるでしょう。

けれども、その本当の理由を考えてみた方は少ないと思います。

親御さんは皆、口を揃えて、「子供のため」と言います。

けれども、学校生活も上手く行かず、家では怒鳴られてばかりで、友達からも周囲からも全く評価されない境遇が、「子ども自身の努力のせい」ではないということを、はっきりさせる事は非常に重要だと思います。

そして、親御さんが恐れる「周囲の目」も、子供達には「親が恐れるからこそ」怖い周囲の目となっている点に気がついて頂きたいです。また、周囲の目が異常に気になる現状は、変えていかなければならないでしょう。そのためにも、社会はこの種の問題を抱えた子供の存在に目を向けるときが来ていると思います。

子供達は、好きで「分からない」のではないですし、適切な指導で改善は望めます。

また、周囲の人にも疑問点は沢山あるでしょう。よって、疑問点があれば、噂し合うのではなく、直接、学校の先生や親御さんにたずねてみたほうが良いと思います。

「知る努力」をする事で、双方が歩み寄る事が可能である、と私は思っています。

## 人の成長と言う事

私が思うに、人間の成長とは、人を受け入れられるようになる事や、あるいは他人の境遇や状況を、類推する力を持つ事だと思っています。

逆に言えば、私が指導する子供達は、これが難しい事が多いです。

よって、基本的に、周囲から浮きやすい状態であると思います。

けれども、このような中で、特徴的なのは、「自分の事には」頭が回ると言う事です。

ですから、子供達の「嘘」は割と日常的ですし、あり得ない嘘も平気でつきます。また、自分の利益は、知恵を使い場面を見て判断します。自己利益を死守しようとする為、「人間関係が理解できない」と言う事が、周囲に非常に分かりにくくなる悪循環もあります。

思うに、人の脳の発達「周囲の幸福を願える」と言う事にも関係が深い印象です。

確かに発達の問題は、学習面においてを指摘される事が多いのですが、私の目から見て、人間関係に躓くお子さんについて「必ず」気になることが、自己中心的な考え方です。

赤ちゃんの頃には、自分の要求を全て通し、それを周囲が必ずやってくれるという感覚があると思います。けれども大人になるにつれて「相手」が見えるようになるでしょう。この自分優先の感覚をずっともち続けているのが、私が教える子供達である気がします。

その事を踏まえて、社会には、自分だけが優先される場はない、と言う事を教えてあげて頂ければと思います。

同時に、他人の様子を気にかけ、お互いに助け合う事こそが、社会で必要な考え方である事も教えてあげて欲しいです。

私が指導する子供達は成長し、物事を理解するのに、時間がかかるのが普通です。

けれども、「数ミリ」単位であっても、少しずつは「マシン」になっていくはずですので、どうか根気よく見守ってあげて欲しいと思います。

## ② 孤立を防ぐ

### 難しい思春期

今の時代、思春期があまり明確ではないお子さんもいるようですが、多くの場合、思春期は親子関係がギクシャクする時期だと思います。

これは、私が担当する子供達も同じです。

親御さんからしてみれば、ただでさえ「分かりにくい」わが子の言動が、より秘密めいてくるのがこの思春期です。

よって、心配のあまり、根掘り葉掘り子供を詮索する親御さんもいると思います。

けれども、何かしらの障害があっても、子供さんは確実に成長していると思います。

ですから、「親が介入しない事柄」があっても、それが普通だとまず割り切ることです。

### 私が守らなければ…

親御さんがとにかくわが子とベッタリになりがちなのは、要するに親御さんなりに、わが子を「守る」為だと思います。

けれども、その役割を周囲の人と共有できたら、かなり状況が違って来るでしょう。

つまり、親御さんの目が無くても、子供達が自由に暮らしていく事ができるということです。

子供達は、基礎的な判断が難しい場合も多いです。

- ・どのようにすれば効率がよいか？
- ・どうすれば、自分を含めた皆の利益になるか？
- ・また、どうすれば揉め事やトラブルを回避できるか？

とにかく様々な事柄について、驚くような考えの道筋で行動する事も珍しくありません。

だからこそ、親御さんの立場から言えば、わが子には始終監視、サポートが必要、と感じるようです。けれども、それでは、子供さんもまた親御さんも疲れてしまいます。

子供達の特性を親御さんから聞いておき、苦手な場面がやってきたら、それを周囲がサポートする姿勢が望ましいと思います。

### 孤立とは…

結局のところ、私が持つ子供達の多くは、視野が狭く、また、思い込みが激しい場合が多いので一人で思い悩みます。また、「相手がそう思っていないくても」自分で相手の事を「悪いように考えて」一人で腹を立てる姿を見ることも珍しくありません。

その負の回転は、要するに、自分自身が、相手に受け入れられている自信がないためだと思います。とにかく「悪い方へ」考えるのが普通です。

また、子供達の発達の問題が分かりやすい場合、それを周囲に揶揄される場合や、影で

噂される経験を持つ子供も多いです。

結局のところ、周囲への不信感が、その負の頭の回転につながっている印象です。

よって、孤立する道筋を「自分自身で」たどる事もめずらしくありません。

そんな時、一番近くにいるのが親御さんなのですが、子供達は親の言葉を、「よいしょしている」「慰めようとしている」「親は分かっている」と、受け入れない事も多いです。

だからこそ、立場と視点が違う「善意の第三者」「客観的な視点」が必要な場面がある、というのが私の印象です。

### 支える難しさ

発達に問題を抱えた人を理解し支える事は、本当に難しく、大変だと思います。

それは、私が実感として言えることでもあります。

その難しさの原点は「分かりにくさ」であると思います。つまり、「どういう意図でその子供達がそういう発言や言動を繰り返しているのか？」という原点が、非常に分かりにくい事も多々ある事です。また、「何故反応がないのか？」と言う事を悩む事もあります。

考えてみますと、例えば、目が見えない方であれば、何に困っているのかを類推する事が、比較的可能だと思います。

また、「目が見えない」と言う状態を、アイマスクの装着などで体験する事もできますし、ある程度「実感として」視覚障害の方の現状を理解する事も無理ではありません。

けれども、発達に問題を抱えた子供達の脳の回路は、確かに代表的な回転の仕方はあるのですが、個々に微妙に違う事も多いです。よって、結局のところ「その子自身の」発達障害が「オーダーメイド」で存在する形になります。

よって、結局のところ、何に困っているのか？あるいは、何がわかっていないのかについて、本人に尋ねる事や、常日頃、観察するしかないと言うのが、私の率直な感想です。

### 長い面談？

私は家庭教師としてご家庭に伺いますが、発達障害の疑いが顕著であるほど、授業後の親御さんとの面談が長い傾向にあります。

なぜなら、親御さんの不安要素が非常に多いからです。

また、周囲の人に、子供の「分からない具合」を話す事がためられる、と言うのもあると思います。なぜなら、超基礎的な事が分からない為です。

どちらにしても、親御さんが向き合っている現実について、それを共有できる相手を必要としている事は確かです。

超若輩者で、しかも未婚、子なしの私に、苦勞を語るしかない親御さんの現状をどうか理解してあげて欲しいと思います。

そして、是非声をかけてあげてください。

そのとき、「心配ないよ」と言う事ではなく、「気になるのであれば、医者をはじめとする発達の専門機関に見せたら？力を借りよう！」と言う事をアドバイスしてあげてください。暗いトンネルから抜け出すチャンスが、まさにそこにあるのですから。

### ③ 社会的企業

#### 心配の先

発達に問題がある子供達の大きな心配…それは、社会においてきちんとやっていけるのか？と言う事であると思います。

なぜなら、子供時代からトラブルが続く中で、社会に出て、それを克服した上で、やっていけるのか？と言う問題は、大きな課題として、親御さんにのし掛かるようです。

私の中で、子供達が発達障害のラインであるか否かを類推するヒントがあります。

それは、「親が泣くほどの苦労か」と言うものです。

基本的に、私自身も発達障害の可能性を強く疑うラインであれば、親御さんは子供達の過去や将来について話すとき、ほぼ確実に涙ぐみます。

要するに、通常ではあり得ない苦労があるためだと思います。

その中で、親御さん自身が生きている場合にはまだよいのですが、心配なのは親御さんが亡くなったその後です。

それを考える為にも、子供達の就業は大きな意味を持つと思います。

#### 社会的企業

日本には、「福祉施設」は沢山あると思いますが、「社会的企業」を名乗る場所はそうない印象です。

社会的企業とは、以下の企業の事です。

社会的課題の解決を目的として収益事業に取り組む事業体のことである(ウィキペディア)

子供達の就職先を考える際、従来の受け皿では厳しい場合もあると思います。けれども、子供達は、理解さえ出来れば、できる事も沢山あります。

よって、このような子供達が安心して働ける場が出来たらというのが私の願いです。

#### 私の大きな夢

私の将来の希望として、以下の企業が出来ればと思っています。

それは、発達障害を持つ子供達のサポートを、発達障害を抱えながらも頑張っ社会に出た大人に任せると言うものです。

実際のところ、子供時代には、何が理解できないかを言い表し、また、何が不安なのかを言い表す事が、難しい事が多いように思います。

けれども、同じ障害を抱えた人であれば、その思いを汲み取る事が用意ですし、また、人の助けをすると言う事で、大人の側にとっても、学びが多くなりそうです。

発達障害やその周辺の人を支えたい人は、まだまだ非常に少ないと思います。

よって、助けを待つというよりは、循環させる形であるほうが、より現実的である気が

しています。

また、その「先生」に学校に来てもらい、実際に講演を聞き、あるいは、子供達の学習をサポートする授業を持ってもよいでしょう。

そうする事で、今現在困っている子供と、周囲との境目が少しずつ緩和される事が目的です。

あくまでも夢ですが、実現したら、今現在子供である方にも、そして成長し社会でやって行きたい当事者も巻き込む大きなモデルとなると思います。

最後に

今の日本では、発達に問題を抱えた子供達を支援するシステムが存在しているはずですが。けれども、私の印象では、効果的に、あるいは適切な形で、全ての子供にそのシステムが行き渡っているとは思えない状況にあると思います。

なぜなら、支援が必要なのに、また支援がありさえすれば、特に学習に関しては、著しく向上する可能性のある子供達が、多く放置されている為です。

私の中では、以下の目標があります。

- ・ 小学生の子供であれば、何らかの科目で、百点を取れるように
- ・ 中学生以上の子供であれば、何らかの科目で、八割以上を取れるように

基本的に、子供の多くが、この目標を達成しています。なぜなら、「取れる」のが前提で教えるためだと思います。

その際、重要なのは、点数そのものではなく、子供達の「人格・人権」が家族をはじめ周囲に認められることです。私はそのために指導していると言っても過言ではありません。

そして非常に興味深い事に、「点数を取れた後」その後、子供達は必ず下降します。なぜなら、「満足」だからです。親の喜ぶ顔を見て、百点を味わってみたら、もうそれで十分である様子も多々見られます。

また、彼らにとって、百点を取ると言う事は、かなりの労力を要する事です。

それは、発達に問題があるお子さんの場合は顕著です。よって、その努力を「ずっと」継続するのは、非常に大変な事であると言う事を、まずは理解する必要があると思います。

そして、望みすぎない事です。

親御さんの過度の期待は、子供達を疲弊させ、子供達は、また同じ「侮辱」の中に生きる事になってしまいます。

そして、発達に問題がある子供達を支える先生達は、同じく、疲弊しています。それは、子供達を指導する事、そのものでない事は、共通していると思います。

たとえば、親御さんの現実を見ない言動です。また、周囲の協力体制がない事です。また、子供の自己意識が下がる原因となる、周囲の差別の言動だったりすると思います。その中で、自分の無力さを思い、自分の存在意義を考える場面が多いのが現状です。

また、今は「善意の」人たちによって、発達に問題がある子供達は支えられているのが印象です。そして、親御さんもそれに依存しているのが現状だと思います。

彼らの立場の保全や、十分な資金を得られるシステムを、本当の意味で確立していく必要があるでしょう。また、資格や立場に関係なく、得意な分野や、成果が高かったものを特化し、検討する場が必要です。また、町や市の中で、横のつながりを強化し、子供達が、支援ネットから滑り落ちる事がないようにしなければならないと思います。

外国では、変に発達障害に対して隠したり、言いよどんだりする事がないようです。

「支援が必要な子供には、関係者の義務として、必ずその支援を行き渡らせる」

この原則こそが、今、通常学級で孤立している子供を救うのではないのでしょうか？

あとがき

私は、一般の大学を出た人間であり、教育の博士号を持っているわけではありません。よって、いわゆる「専門家」ではありませんし、何らかの資格があるわけではありません。

けれども、そんな私が大変なケースを「指導」しなければ、ならない理由はただ一つ、「他に受け皿がない」為です。また、今の制度が機能していない証拠の一つこそが、「専門でない私の所」に、発達障害の疑いがある子供からの依頼がある、と言う事実でしょう。

また私は「基礎学力を付けたい人」と言う事で生徒さんを募集しています。「発達障害の人」と限定すると、発達診断を受けていない子供達が、申し込んでこない為です。

考えてみますと、今一番、考慮しなければならないのは、「診断を受けていないが」学習や人間関係での問題が顕著なお子さんであると思います。

そして、いわゆる教育業界にいながら、「外部」である私が実際に見た、現場を、少しでもお伝えできたらと思い文章を書きました。

考えてみますと、私は、学生のときから、「伸び悩む子供」をサポートしようと考えていました。けれども、学校で働こうと思わなかったのも事実です。

なぜなら、最初から、学校や塾で上手く行かなかった子供をサポートしたかった為です。

ここでは、省略しますが、それは私の生い立ちに強く関係があると思います。

一つ申し上げると、「私は九九が覚えられなかった」と言う事を、子供にも、また親御さんにも平気で言うタイプですし、いわゆる子供が「躓く箇所」学習単位では、大体、私自身が躓いた経緯があります。

それも私の大きな「自慢」の一つです。

発達障害一分かりやすくいうと、「人間関係や、学習に日常的に問題を抱えている」というと分かりやすいかもしれません。

そして、そのような子供達は、確実に、日本中に沢山います。

そして、彼らは、強い孤独と絶望の中に居る事が普通であります。

この本を読む事で、当事者の方だけでなく、わが子の隣の席の子や、近所の子供達を理解していくきっかけになれば、非常に嬉しく思います。

また、私は今一人で指導していますが、それも限界に達しています。精神的にも体力的にきつい仕事である為です。元々、「か弱い」タイプだった私の身体は悲鳴を上げているのも事実です。よって、私も「親に怒られる」と言う体験が、今も日常にあります。

ですから、この本を読んで、私が向き合っている子供達をサポートしたいと言う方がいたら、是非ご連絡下さい。その指導方法を喜んでお教えします。

そして、より上手い指導方法や、考え方があれば、是非教えてください。私は一人で、少ない知恵を振り絞っているのです、そのような助言があれば、嬉しく思います。

それを踏まえた上で、様々な状況にある子供達を支援していくきっかけや、問題点を考える材料として、皆様にこの文章を読んで頂けたら…。

接骨院に通い、腰痛をおして、パソコンに向かった「かい」があると思っています。